

河原寬著

奇蹟的征病法

東京・資文堂刊

序

本書を世の病める人々と、よりよき健康を望まざる人々とに贈らして頂くに當つて、私は今更に慚愧の念に堪へない氣のする事を明ら様に中上げねばならない。

これは正しく私が信仰生活に入らして頂いてからの最初の著である。それだけ私の宗教——天理教に對する理解は淺く、宗教的體験は稀薄だつた。然もその淺さと稀薄さを以て敢て本書を世に贈らうとしたのは、一種の暴舉に近い。この點で私は茲に、これを讀んで下さる人々に衷心からお詫せねばならないと思ふ。

併し、一方、これによつて本當の意味での「征病」の如何なるものであるかと云ふ事の一端を示す事の出来ることを私は信じて疑はない。讀者は本書の成立の粗雑さ、文章の拙劣さ、そして何よりも全體としての「淺さ」を感じられるであらう。けれども同時に、本書を、自分の淺さを顧る暇さへなく、敢て「暴舉」に出でずには居られなかつた私の驚異と感謝の、如何に大きく深いものであつたかを、その驚異と感謝とを世の病める人々に傳へやうとする動機が如何に純粹なものであつたかを、必ず感じて下さると信じてゐる。

死者が甦る——世にこれ以上の驚異があらうか。人々は必ずやそれが單なる偶然であつたのだと云つてこの事實を否定するに違ひない。

だが、私は敢然としてこの否定を否定する。では私の、この「否定の否定」の根據は何か。それは體驗である。私はこの六ヶ月の間に幾多の「奇蹟」を體驗した。そして今や「奇蹟」は私にとつては決して奇蹟ではなくなつてゐる。それは神の顯現し給ふところに於ては、誠に日常の茶飯事ではない。心の底から自らを懺悔し、神の顯現を求むる時、そこには如何なる「奇蹟」も容易に現れ得るのである。私の次男は死から甦つた。私の三男は煮えたぎつてゐるものを兩足全體に浴びて、その部分が赤く色付きさへしなかつた。愚妻の友人の次女は醫師に匙を投げられた痲痺から六時間の間にめきめきと回復に向つた。

私は全心を以て神の存在を感じる。神の廣大無邊なる力の現るゝ時、そこには一の「不可能」も在り得ない。結核、癲病、脊髄病、盲目、その他ありとある業病も、一として全快の望みなしと云ふ痲痺は無い。

ひとに笑はれそしられて

ふしぎな助けをするほどに

今日まで天理教は如何に世の人々から笑はれそしられて來たであらう。正しく笑はれそしられての道であつた。同時に如何に多くの「ふしぎな助け」を現して來たことであらう。信徒の人々は「愚民」視されて來た。今日もなほ同様である。併しその愚民が、如何に自らと他の人々の精神を力強く建直して來たであらう。

よう／＼こゝまでついできた

じつ、たすけはこれからや

實の助けは肉體の疾病の助けではなく、その「心」の助けである。助けあげられた心の所有者には疾病はない。その人の死は「天命の死」以外の何物でもないのである。

讀者諸氏よ。

私は衷心から諸君に呼びかけさせて頂く。以上の私の言葉を信ぜよ。私の以上の言葉には些かの虚偽もない。諸君は本書の粗雑さと淺さとを超えて、直接に、本書の底を流れてゐる私の信仰の根元を把握下さることを、切望せずには居られない。

最後に——

私は自分を信仰に導き入れて下さつた東京市外中野本郷、天理教都橋宣教所長中村鶴吉氏、及び私

の養母に當る栃木縣烏山町河原ノブ、この御二人に、心からの感謝を捧げさせて頂きたい。養母は約七ヶ年、火の出るやうな迫害に堪えてその信仰を棄てず、よく頑な私達を導かうと努めて下さつた。沁々と母の通つてくれた苦艱の道を思ふ時、私は泪なしに居る事は出来ない。

又私は、今日まで不孝不悌の限りを盡して來た兩親、兄弟、そしていろ／＼の事で迷惑をおかけして來た凡ての人々に、茲に心からのお詫びをさせて頂きたいと思ふ。

於東京市外中野寓居

著者

目次

四福音書に録された奇蹟的征病	五
四福音書に録された奇蹟的征病	五
宗教的奇蹟に就て	七
宗教的奇蹟に就て	七
奇蹟否定説に就て	九
奇蹟肯定論に就て	九
新興宗教の病理觀	五五
新興宗教の病理觀	五五
新興宗教の征病法	七一
精神病	七五
中風症	八三
齒の疫病	八六
目次	一

鼻の疫病	九
おこり	九
口の部分に現れる疾病の因	六
心臓病	一〇一
風邪	一〇三
癩病	一〇六
頭の腫物	一〇九
頭髮のちぢれ	一一〇
頭の熱	一一一
眼の疾病	一一一
喘息	一一一
しゃくり	一一二
咳	一一三
嘔吐	一一三

癩病	一一三
耳疾	一一三
腹痛	一一三
肩凝	一一三
背病	一一三
背髄	一一三
駝背	一一三
脱腸	一一三
乳の疾病	一一三
瘤	一一三
しもやけ	一一三
あかぎれ	一一三
漆樹その他によるかぶれ	一一三
足の疾病	一一三
痔疾	一一三

淋病……………一六〇

未成年者に現れる疾病……………一六一

女性特有の疾病……………一六六

新興宗教の現したる奇蹟的征病……………一七一

新興宗教の現したる奇蹟的征病……………一七三

(1) 甦つた死児……………一八九

(2) 六年間の婦人病が一週間で全治……………一九五

(3) 孔だらけの護符……………一九七

(4) 半歳の腎臓病の奇蹟的全治……………一九九

(5) 二十二年間の喘息が一週間で全治……………二〇〇

(6) 生れ付の癩が立つ……………二〇二

(7) 癩病の全治……………二〇三

(8) 二寸余の竹刺……………二〇三

(9) 慢性胃腸病全治……………二一〇

(10) 癩癧病全治……………二一四

(11) 盲目の眼が開く……………二二六

(12) 第三期梅毒全癒……………二三三

(13) 中風症全快……………二三四

(14) 癩がとれた話……………二三七

(15) 重き背癩病全治……………二四二

(16) 難産に對する宗教的奇蹟……………二四五

私自身の體験記録……………二五〇

佛敎に現れたる征病法……………二六八

夜船閑話……………二七一

内觀の具體的方法……………二九一

『目次』了——

病者諸氏に

著者

御一讀下さればお判りの事です。私は自分の第四子が死から甦らして頂いたことが機縁となつて昭和四年五月天理教に入信させて頂いた者です。自分自身としても幾度となくお助けを受けて居りますから、敢て次の事を申し上げます。

病氣の苦しみはどなたでも同じ事です。もし讀者諸氏の中に重病にお悩みの方がありましたら、東京市外中野三七九八著者宛御手紙を下されば、遠隔の地の方ならば手紙を以て、近接地でしたら直接にお話を取次がして頂きたいと思ひます。このお道は話一條の助け路と云つて、天の理の話さへすつかりお判りになれば、そしてお心の埃がとれれば、死からさへ甦ることが出来ます。

そして目出度く御全快なさいましたら、只神様への御禮。自分のおなほりなされた事を、他の御病人にお取次ぎさへして頂けば、それで結構です、決して物質的な御禮などに心配なさるには及ばないのですから。心貧しい一信徒の神様への御禮として、喜んで右の事をさせて頂きたい心持を無にしないで頂きたいと存じます。

奇蹟的征病法

河原 寛 著

四福音書に録された奇蹟的征病

四福音書に録された奇蹟的征病

現存してゐるクリスト教文献中、最古の物として一般から認められてゐるのは、數多の聖徒に送つたパウロの書簡であると云はれてゐる。併しその中には、イエスの行つた奇蹟に就ては少しも誌されて居らない。その他にも、古文書がないではないが、いづれも断片的なものばかりで、充分にこの奇蹟的征病を探究する資料とはならない。故に、これを知るには、如何しても所謂四福音書、即ち、マルコ傳、マタイ傳、ヨハネ傳、ルカ傳の四種に據るの外はないのである。

この四福音書中には、數多くの奇蹟が録されてゐる。併し中には、相互に重複するものがあるし、又矛盾するものもあるので、その正確な數を擧げるとは頗る困難である。けれども、その數多くの奇蹟中、最も數多く現れてゐるのはこの征病的奇蹟であることは確かで、總數の約八割を占めてゐるやうに思はれるにも拘らず、全體——四福音書の凡てに同様に記されてゐるものは少い。

この凡てを通じて最も大いなる、而して又最も重要な奇蹟は、勿論イエス自身の復活である。これはマルコ傳第十六章、ルカ傳の第二十四章、ヨハネ傳の第二十章、マタイ傳の第二十八章に夫々記

六
録されてゐるが、この四福音書中、最古の物は、イエスが磔刑に處せられた時から三十年乃至四十年後、即ち西暦六十五年乃至七十年頃に書かれたものとされてゐる「マルコ傳」であつて、それ以外のものは、この書を基礎として書かれたものであると認められてゐるから、「マルコ傳」によつてこれを記せば、

安息日終りし時、マグダラのマリア、ヤコブの母マリヤ及びサロメ往きて、イエスに抹らんとて香料を買ひ、一週ひとまはりの首はじめの日、日の出でたる頃いと早く墓に行く、誰か我らの爲に墓の入口より石を轉すべきと語り合ひしに、目をあぐれば石の既に轉しあるを見る、この石は甚だ大きかりき、墓に入り、右の方に白き衣を着たる若者の坐するを見て甚く驚く、若者いふ「おどろくな、汝らは十字架につけられ給ひしナザレのイエスを尋ねれど、既に甦りて、此處に在らず、視よ、納めし處は此處なり、然れど往きて、弟子たちとペテロに告げよ、汝らに先だちてガリラヤに往き給ふ、彼處にて調ゆるを得ん、曾て汝らに云ひ給ひし如し」女等いたく驚きをのよき、墓より退出したが、懼れたれば一言をも人に語らざりき。

かくて甦つたイエスは先づマグダラのマリアに現れ、又ある田舎道に異つた姿で現れたが、使徒達は、これを聞いても信じなかつた。而して後、十一人の使徒が食事をしてゐる處へ姿を見せて、その

不信仰と心のかたくなさを責めたことが誌されてゐるが、「マルコ傳」のこの記述は、他の三書によつて、より詳細に、より力強く描き替へられてゐる。恐らくそれは、噂と云ふものが、次第に誇張される性質のものであるから、口より口へと傳へられるに従つて、次第に附加物が加へられたものと思惟すべきであらう。試みにその例として「ヨハネ傳」の記述を掲げてみよう。

一週ひとまはりのはじめの日、朝まだき暗きうちにマグダラのマリア、墓にきたりて墓より石の取除けあるを見る、乃ち走りゆき、シモン、ペテロとイエスの愛し給ひしかの弟子との許に至りて云ふ、「たれか主を墓より取去れり、何處に置きしか我ら知らず」ペテロとかの弟子といひて墓に行く、二人ともに走りたれど、かの弟子ペテロより疾く走りて先に墓にいたり、屈みて布の置きたるを見れど、内には入らず。シモン、ペテロ後おそれ來り、墓に入りて布の置きたるを見、また首かぶを包みし手拭は布とともにあらず、他ほかのところところに巻きてあるを見る、先に墓にきたれる彼の弟子もまた入り之れを見て信ず、彼等は聖書に録したる、死人の中よりその甦へり給ふべきことを未だ悟らざりしなり、遂ひに二人の弟子おのが家にかへれり。

併しマリア一人だけは墓の外に立つたまゝ泣いてゐた。泣き乍ら屈んで、墓の内を見たところが、イエスの屍體の置かれた處に、白い衣を着た二人の天使が、一人は首の方に、一人は足の方に坐つて

ゐるのを見た。そしてマリヤに言葉かけた。

『お前は何故泣いてゐるのか。』

マリヤは

『誰か妾の主を取つて行つて終ひました、そして、何處へお置きしたか妾には判らないのです。』

と云つて背後を見ると、そこに立つてゐるイエスの姿を認めた。

『何故泣くのぞ、誰を尋ねてゐるのか。』

イエスがかう尋ねかけると、マリヤはその男を園丁だと思ひ違つて、

『もしも、あなたが取去つたのだしたら、何處へ置いてあるかを教へて下さい。妾が引取りますから。』

ら。』

と云ふとイエスは改めて

『マリヤよ。』

と呼んだ。名を呼ばれてマリヤは驚愕した。そして

『ラボニ（釋けば師）よ』

と呼んだ。すると

『私には觸れてはいけない。私はまだ天なる父の御許に昇つてゐないのだから。お前は兄弟姉妹のところに行つて、私はお前たちの父、即ち私の神、即ちお前たちの神の御許に昇つたと傳へてくれ。』

と命じたので、マグダラのマリヤは命令の通り弟子たちのところへ行つて

『妾は主の御姿を見ました。』

と云つた後、主の言葉を傳へた。

この二ツ、即ち「マルコ傳」に現れた復活と、「マタイ傳」に現れた復活とは、かなりの相異のある事が判る。後者の方は遙かに潤色を加へてゐるばかりでなく、事實の上にも差異があることを認めねばならない。併し、いづれにしても、イエスが死から甦つた事實に於ては一である。この復活は疑惑と逡巡とに彷徨してゐた使徒に強い力を與へた、信念を與へた。そして、假令死を目前に見るも、一步も退かじと云ふ不退轉の勇猛心を與へたのである。

次に大いなる奇蹟としては、數多くの聖畫家によつて描かれてゐる『ラザロの復活』を挙げねばならない。明かにこれはクリスト自身の復活に次いで驚異すべきものであつて、征病的奇蹟としては正に最大なる奇蹟と云はねばならないであらうが、これは『ヨハネ傳』のみに記されてゐるもので、同く甦りの奇蹟としては他に「ヤイロの小女の甦り」がある。「ラザロの甦り」に就ては次の如く記述さ

れてゐる。

茲に病める者あり、ラザロと云ふ、マリヤとその姉妹マルタとの村ベタニアの人なり、此のマリヤは主に香油をぬり、頭髮にて御足を拭ひし者にして、病めるラザロはその兄弟なり、姉妹ら人をイエスに遺して、『主、視よ、汝の愛し給ふもの病めり』と言はしむ、之れを聞いてイエス言ひ給ふ、『この病は死に到らず、神の榮光のため、神の子のこれに由りて榮光を受けんためなり』イエスはマルタと、その姉妹とラザロとを愛し給へり。ラザロの病みたるを聞いて、その居給ひし處になほ二日留り、而て後弟子たちと言ひ給ふ、『われら復ユダヤに往くべし』弟子たち言ふ、『ラビ、この程もユダヤ人、汝を右にて撃たんとせしに、復かしこに往き給ふか』イエス答へ給ふ、一日に十二時あるにあらずや、人もし晝あるかば、此の世の光を見るゆゑに蹟くことなし。夜あるかば、光その人になきゆゑに蹟くなり』かく言ひてのち復言ひ給ふ、『われらの友、ラザロ眠れり、されど我よび起さんために往くなり』弟子たち言ふ、『主よ、眠れるならば癒ゆべし』イエスは彼の死にたるを言ひ給ひしなれど、弟子たちは癒て眠れるを言ひ給ふと思へるなり。爰にイエス明白に言ひ給ふ、『ラザロは死にたり。我、かしこに居らざりし事を汝等のために喜ぶ。汝等をして信ぜしめんとてなり。然れど我ら今その許に往くべし』デドモと稱ふるトマス、他の弟子たち

ちに言ふ、『われらも往きて彼と共に死ぬべし』

さてイエス來り見給へば、ラザロの墓にあること、既に四日なりき、ベタニアはエルサレムに近くして、二十五丁ばかりの距離なるが、數多のユダヤ人、マルタとマリヤとをその兄弟の事につき慰めんとて來れり。マルタはイエス來給ふと聞きて出で迎へたれど、マリヤなほ家に坐し居たり。マルタ、イエスに言ふ、『主よ、もし此處に在ししならば、我が兄弟は死なざりしものを。されど今にても我は知る、何事を神に願ひ給ふとも神は與へ給はん』イエス言ひ給ふ、『なんぢの兄弟は甦へるべし』マルタ言ふ、『をはりの日、復活の時に甦るべきを知る』イエス言ひ給ふ、『我は復活なり、生命なり、我を信するものは死ぬとも生きん、凡そ生きて我を信するものは、永遠に死なざるべし。汝これを信するか』彼いふ、『主よ然り、我なんぢは世に來るべきキリスト、神の子なりと信ず』

かく言ひて後ゆきて窈かにその姉妹マリヤを呼びて、『師きたりて汝をよび給ふ』と言ふ。マリヤ之れをきゝ急ぎ起ちて御許に往けり。イエスは未だ村に入らず、尙マルタの迎へし處に居給ふ。マリヤと共に家に居りて慰め居たるユダヤ人、その急ぎ立ちて出でゆくを見、かれは欺かんとて墓に往くと思ひて後に隨へり。斯くてマリヤ、イエスの居給ふ處にいたり、之れを見てその足下

に伏し、「主よ、もし此處に在しゝならば、我が兄弟は死なざりしものを」と言ふ。イエスカレが泣き居り、共に來りしユダヤ人も泣き居るを見て、心を傷め悲しみて言ひ給ふ、「かれを何處に置きしか」彼ら言ふ、「主よ、來りて見給へ」イエス涙をながし給ふ。爰にユダヤ人ら言ふ、「視よ、いかばかり彼を愛せしぞや」その中の或者ども言ふ、「盲人の目をあけしこの人にして、彼を死なざらしむること能はざりしか」イエスマた心を傷めつゝ墓にいたり給ふ。墓は洞にして石を置きて塞げり。イエス言ひ給ふ、「石を除けよ」死にし人の姉妹マルタ言ふ、「主よ、彼ははや與し、四日を経たればなり」イエス言ひ給ふ、「われ汝に、もし信ぜば神の榮光を見んと言ひしにあらすや」こゝに人々石を除けたり。イエス眼をあげて言ひたまふ、「父よ、我にきゝ給ひしを謝す。常にきき給ふを我は知る。然るに斯く言ふは、傍に立つ群衆の爲にして、汝の我を遣し給ひしことを之に信ぜしめんとてなり」斯く言ひて後、聲高く「ラザロよ、出で來れ」と呼ばり給へば、死にしも布にて足と手とを巻かれたるまゝ出で來る、顔も手拭にて包まれたり。イエス「これを解きて往かしめよ」と言ひ給ふ。

この奇蹟を行つたのを見た群衆中のある者は、行つてこれをバリサイ人に告げたので、祭司長やパリサイ人は直ちに會議を開いて、もしこのまゝで放任して置けば、人々はみな彼を信じ、引いてはこ

の土地と國人とは奪はれるかも知れない——かうした考へから、遂ひにイエスを殺害すべきことを議つたのであつた。

このラザロの復活を叙した一章は、「ヨハネ傳」中に於ける出色の文章と云へるであらう。その冴えは信仰の生み出した力強い底光りのする冴えで、及び難い感じを受けずには居られないと同時に、

我はよみがへりなり、生命なり、我を信するものは死すとも生きん、凡そ生きて我を信する者は永遠に死なざるべし。

等の力強い、信仰の深みから發せられた言葉もあつて、讀む人の心を打つ。

次に「ヤイロの少女の甦り」の記述を示さう。これは、「マルコ傳」の第五章、「マタイ傳」の第九章「ルカ傳」の第八章等に記されてゐるが、茲には「ルカ傳」から採つて掲げる。

かくてイエスの歸り給ひし時、群衆これを迎ふ、みな待ちゐたるなり。視よ、會堂にてヤイロと云ふ者あり、來りてイエスの足下に伏し、その家に來り給はんことを願ふ。おほよそ十二歳ほどの一人娘ありて死ぬばかりなる故なり。イエスの行き給ふとき、群衆かこみ塞る。

(中略)

かく語り給ふほどに、會堂司の家より人きたりて言ふ、「なんちの娘ははや死にたり、師を煩はす

な』イエス之れを聞きて會堂司に答へ給ふ、『懼るな、たゞ信ぜよ。さらば娘は救はれん』イエス家に至りて、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ及び子の父母の他は、ともに入ることを誰にも許し給はず。人みな泣き、かつ子のために敷き居たりしが、イエス言ひたまふ『泣くな、死にたるにあらず、寝ねたるなり』人々その死にたるを知れば、イエスを嘲笑ふ。然るにイエス子の手をとり、呼びて『子よ、起きよ』と言ひ給へば、その靈かへりて立所に起く。イエス食物を之れに與ふることを命じ給ふ。その兩親おどろきたり。イエス此の有りし事を誰にも語らぬやうに命じ給ふ。

上掲ラザロとヤイロの少女の甦りに於て異るところは、前者は死後四日間を経過した屍であり、後者は死後間もない、時間の相異、それに、前者に於ては、眼を擧げて呼んだのに對し、後者の場合には自らその手を取つて呼んだことである。更に前者の場合には、特に何等の注意も與へなかつたが、後者の場合には、

『この事は何人にも語るな。』

と口留めしてゐる事であるが、かうした口留めを、クリストは往々にして命じてゐるのを見る。

以上三ツの甦りを除く他の疴病的奇蹟は、いづれも大小異同であるが、その重なるものを掲げると、

(1) シモン・ペテロの外姑の熱を醫せられたことは、「マルコ傳」にも「ルカ傳」にも「マタイ傳」に

も誌されてゐるが、夫々に些かの相違がある。即ち、「マルコ傳」には、

會堂を出でて、直ちにヤコブとヨハネを伴ひて、シモン及びアンデレの家に入り給ふ。シモンの外姑、熱を病みて臥しゐたれば、人々たゞちに之れをイエスに告ぐ。イエス往きて、その手をとりに、起し給へば、熱さりて女かれらに事ふ。

とあり、「ルカ傳」には、

イエス會堂を立ちいでて、シモンの家に入り給ふ。シモンの外姑おもし熱を患ひ居たれば、人々これが爲にイエスに願ふ。その傍らに立ちて熱を責めたまへば、熱去りて女たちどころに起きて彼らに事ふ。

とあつて、前者は手をとると熱が去つたやうに録され、後者は、熱を責めたとなつてゐる。而して「マタイ傳」には、手が觸ると熱は去つたと記されてゐる。

(2) 癩病人を醫した事も「マルコ傳」「ルカ傳」等に現れてゐるが、「ルカ傳」に據つて示すに、

イエス或る町に居給ふとき、視よ、全身癩病をわづらふ者あり。イエスを見て平伏し、願ふて言ふ『主よ、御意あらば我を潔くなし給ふを得ん』イエス手をのべ彼につけて、『わが意なり、潔くなれ』と言ひ給へば、直ちに癩病されり。イエス之を誰にも語らぬやうに命じ、且つ言ひ給ふ『た

だ往きて己を祭司に見せ、モーゼが命じたるが如く汝のきよめの爲に獻物して、人々に證しせよ。』
 「マルコ傳」によると、かくイエスが特に命じたにも拘らず、その癒された癩病人は驚喜して大いにこの事を語り、遍く知らしめたと云ふ。

「ルカ傳」には、他にも癩病を癒したもう一ツの場合を録してゐるが、これは「ルカ傳」以外の三書には全く録されてゐないものであることをこゝつて置く。即ち、同書第十七章を見ると、

イエス、エルサレムに往かんとて、サマリアとガラリアとの間をとほり、或村に入り給ふとき、十人の癩病人これに遇ひて、遙かに立ちどまり、聲を揚げて言ふ、『君イエスよ、我らを憫れみ給へ。』イエス之を見て言ひたまふ、『なんぢら往きて身を祭司等に見せよ』

彼ら往く間に潔められたり。その中の一人、おのが醫されたるを見て、大聲に神を崇めつゝ歸りきたり、イエスの足下に平伏して謝す。これはサマリア人なり。イエス答へて言ひたまふ、『十人みな潔められしならずや、九人は何處にあるか。この他國人のほかは神に榮光を歸せんとして歸りきたるものなきか』かくて之に言ひたまふ、『起ちて往け、なんぢの信仰なんぢを救へり』

(3) 中風症患者の全治——「マタイ傳」の第九章には、中風症の者の歩み出した奇蹟が録されてゐる。イエス船に乗り、渡りて己が町にきたり給ふ。視よ、中風にて床に臥しをる者を、人々みもとに

連れ來れり。イエス彼らの信仰を見て、中風の者に言ひたまふ『子よ、心安かれ、汝の罪ゆるされたり』視よ、或る學者ら心の中にいふ、『この人は神を演すなり』イエスその思ひを知りて言ひ給ふ、『何ゆゑ心に惡しき事をおもふか。汝の罪ゆるされたりと言ふと、起きて歩めと言ふと、いづれが易き。人の子、地にて罪を赦す權威あることを汝らに知らせん爲に』——こゝに中風の者に言ひ給ふ——『起きよ、床をとりて汝の家にかへれ』彼おきて、その家にかへる。群衆これを見ておそれ、斯る能力を人に與へ給へる神を崇めたり。

「ルカ傳」にもこの事は記されてゐるが、その間に些か相違があり、「マタイ傳」の記述より以上に詳細に描かれてゐる。即ち、

或日イエス教をなし給ふとき、ガラリアの村々、ユダヤ及びエルサレムより來りしパリサイ人、教法學者ら、そこに座しゐたり、病を醫すべき主の能力イエスと憎にありき。視よ。人々、中風を病める者を、床にのせて擔ひきたり、之を家に入れて、イエスの前に置かんとすれど、群衆によりて擔ひ入るべき道を得ざれば、家根にのぼり、瓦を取り除けて床のまゝ、人々の中にイエスの前に縫ひ下せり。イエス彼等の信仰を見て言ひたまふ『人よ、汝の罪ゆるされたり』爰に學者パリサイ人ら論じ出で、言ふ『演言をいふ此の人は誰ぞ、神より他に誰か罪を赦すことを得べき』

イエス彼らの論ずる事をさとり、答へて言ひ給ふ『なにを心のうちに論ずるか、「なんぢの罪ゆるされたり」と言ふと、「起きて歩め」といふと孰れか易き。人の子の地にて罪をゆるす權威あることを、汝らに知らしめん爲に』云々

かくてこの奇蹟を眼のあたりに見た人々は驚異にうたれて、
『今日は珍しい事を見た。』

と云ひふらした。併しこの最後の言葉は「マルコ傳」には

『吾等斯くの如き事は斷えて見ざりき。』

となつてゐる。兎に角、奇蹟の顯現の前に人々は大なる神の能力を感じ、その信仰心を揺り動かされたのであることは明かである。この外にも中風患者を癒したことは、諸處に散見するが、いづれも餘りに断片的なるもので、僅か一行にも満たぬものであるから、茲では省略することにす。

(4) 手瘻えの快癒。

又ほかの安息日にイエス會堂に入りて教へをなし給へしに、此處に人ありて其の右の手なえたり學者パリサイ人ら、イエスを訴ふる隙を見出さんと思ひて、安息日に人を醫すや否やを窺ふ。イエス彼らの念を知りて手なえたる人に、『起きて中に立て』と言ひ給へば、起きて立てり。イエス

彼らに言ひ給ふ、『われ汝らに問はん、安息日に善をなすと惡をなすと、生命を救ふと亡すと孰れがよき』かくて一同を見まわして、手なえたる人に、『汝の手を伸べよ』と言ひ給ふ。かれ然らざれば、その手癒ゆ。然るに彼ら狂氣の如くなりて、イエスに何をなさんと語り合へり(ヘルカ傳第六章)

これによると、もしこの手瘻えを醫したならば、安息日にかゝる行爲をなせりとなしてイエスを罰しようとし、パリサイ人達はひそかに様子を覗いてゐた様である。併し「マタイ傳」には、

人々イエスを訴へんと思ひ、問ひて云ふ『安息日に人を醫すことは善きか』彼らに言ひ給ふ、『汝等のうち一匹の羊をもてる者あらんに、もし安息日に穴に陥らば、之を取上げぬか。人は羊より優ること如何許りぞ。さらば安息日に善をなすは可し』

前者に於て消極的だつたパリサイの徒は、「マタイ傳」には積極的に自らの方から問掛けた様に録されてゐる。

(5) 悪鬼に憑かれたる者を癒すこと——これは實に數多く誌されてゐるが、單に一行にも満たぬ記述のものは除き、相當の量あり且つ興味あるものゝみに就て述べやう。「マルコ傳」の第五章を見ると斯て海の彼方なるガラセネ人の地に到る。イエスの舟より上り給ふとき、穢れたる靈に憑かれた

る人、墓より出でて、直ちに遇ふ。この人、墓を住處とす。鏈にてすら今は誰も繋ぎ得ず。彼はしばし足械と鏈とにて繋かれたれど、鏈をちぎり、足械をくだきたり。誰も之を制する力なかりしなり。夜も晝も絶えず墓あるひは山にて叫び、己が身を右にて傷けたり。かれ遙かにイエスを見て、走り來り、御前に平伏し、大聲に叫びて言ふ、『いと高き神の子イエスよ、我は汝と何の關係あらん、神によりて願ふ、我を苦しめ給ふな』これはイエス『穢れし靈よ、この人より出で行け』と言ひ給ひしに因るなり。イエスまた、『汝の名は何か』と問ひ給へば、『わが名はレギオン我ら多きが故なり』と答へ、また己らは此の地の外に逐ひやり給はざらんことを切に求む。彼處の山邊に豚の大なる群、食しむたり。惡鬼ども、イエスに求めて言ふ、『われらを遣して豚に入らしめ給へ』イエス許し給ふ。穢れし靈いでて、豚に入りたれば、二千匹ばかりの豚海に向ひて、崖かけくんだり、海に溺れたり。

飼ふ者共逃げ往きて、町にも里にも告げたれば、人々何事の起りしかを見んとて出づ。斯くてイエスに來り、惡鬼に憑かれたりし者、即ちレギオンをもちたりし者の、衣服をつけ、慥かなる心にて坐しを見るを見て、懼れあひり。かの惡鬼に憑かれたる者の上にある事と、豚の事とを見し者ども、之を具さに告げたれば、人々イエスにその境を去り給はんことを求む云々。

これに比較して、同様の事實を録したものはあるが、「マタイ傳」の第八章は、遙かに簡單である。「ルカ傳」第四章には次の如きものがある。同く惡靈に憑かれたる者に行はれたる奇蹟である。

斯てガリラヤの町カペナウムに下りて、安息日ごとくに人に教へ給へば、人々その教に驚き合ひりその言、權威ありたるに因る。會堂に穢れし惡鬼の靈に憑かれたる人あり、大聲に叫びて言ふ、『あゝ、ナザレのイエスよ、我らは汝となにの關係あらんや。我らを亡さんとて來給ふか。我はなんぢの誰なるかを知る、神の聖者なり』イエス之を禁めて言ひ給ふ。『黙せ、その人より出よ』惡鬼その人を人々の中に倒し、傷つけずして出づ。みな驚き、語り合ひて言ふ『これ如何なる言ぞ、權威と能力とをもて命ずれば、穢れし惡鬼すら出で去る』爰にイエスの噂あまねく四方の地に弘りたり。

これは、「マルコ傳」にも録されてゐるが「マタイ傳」にはこれが省かれてゐる。この外にも惡鬼を追出された者は多くあるが、就中最も有名なのは、マグダラの娼婦マリアであらう。彼女はイエスによつて「七ツの鬼」を追出して貰ひ、入信してよくイエスに仕へ、その魅りをも眼のあたりに見た婦人である。

マリアの外にも、ヘロデの家司クレーザの妻ヨハンナ及びスザンナ、その他多くの女が、憑いてゐた

悪鬼を落して貰つてゐる。

(6) 血漏の女の全快。「マルコ傳」の第五章には次の如きことが録されてゐる。

爰に十二年、血漏を患ひたる女あり。多くの醫者に多く苦しめられ、有てる物をことごとく費したれど、何の効なく、反つて増々悪しくなりたり。イエスの事をきゝて、群衆にまじり、後に來りて、御衣にさわる。その衣にだに觸らば、救はれん』と自ら謂へり。かくて血の泉、たゞちに乾き、病のいへたるを身に覺えたり。イエス直ちに能力の己れより出でたるを自ら知り、群衆の中にて、握返り言ひたまふ、『誰かわが衣に觸りしぞ』弟子たち言ふ、『群衆の押迫るを見て、誰がわれに觸りしぞと言ひ給ふか』イエス此の事を爲し、者を見んとて見回り給ふ。女おそれおのゝき、己が身になりし事を知り、來りて御前に平伏し、ありしまゝを告ぐ。イエス言給ひふ、『娘よなんぢの信仰なんぢを救へり、安らかに往け、病いえて健かになれ』

血漏と云ふのは現在の如何なる疾病に相當するものであるか明かでないが、血が漏れ流れる症である事は確かであるから、月經異常、長血の如き婦人病ではないかと想像される。

この外にもイエスの衣に觸れて癒えたものの例を擧げることが出来る。即ち「マルコ傳」第六章の

五三に、

遂に渡りてゲネサレの地に着き、舟がかりす、舟より上りしに人々直ちにイエスを認めて、遍くあたりを馳せまわり、その在すと聞く處々に、患ふ者を床のまゝ伴れ來る。その到りたまふ處には、村にても、町にても、里にても、病める者を市場におきて、御衣の繻にだに觸らしめ給はんことを願ふ。觸りし者は、みな醫されたり。

これは衣のふさにふれて癒された例であるが、ふさに觸れてさへ癒さるゝと信ぜしめた彼の偉大を想見することが出来るではないか。

(7) 癩痢の子を癒せる奇蹟——これは「ヨハネ傳」を除く三書に見られる奇蹟の一つであるが、就中「マルコ傳」の記述が最も詳細に描出してゐるから、これを次に紹介すると、

相共に弟子たちの許に來りて、大なる群衆の之をめぐり、學者たちの之と論じむたるを見給ふ。群衆みなイエスを見るや否や、いたく驚き、御許に走り往きて禮をなせり。イエス問ひ給ふ『なんぢら何を彼らと論ずるか』群衆のうちの一人次たふ『師よ、啞の靈に憑かれたる我が子を御許に連れ來れり。靈いづこにても彼に憑けば、癩癩け泡をふき、齒をくひしぱり、而して瘦せ衰ふ。御弟子たちに之を逐ひ出すことを請ひたれど能はざりき』爰に彼等に云ひ給ふ『あゝ信なき代なるかな、我いつまで汝らと惜にあらん、何時まで汝らを忍ばん、その子を我の許に連れきたれ』

乃ち連れきたる。彼イエスを見しとき、靈たゞちに之を療撃けたれば、地に倒れ泡をふきて轉び廻る。イエスその父に問ひ給ふ『いつの頃より斯くなりしか』父いふ『をさなき時よりなり。靈しばし彼を火の中水の中に投げ入れて亡さんとせり。然れど汝なにか爲し得ば、我らを憫れみて助け給へ』イエス言ひ給ふ『爲し得ばと言ふか、信する者には、凡ての事なし得らるゝなり』その子の父たゞちに叫びていふ、『われ信ず、信仰なき我を助け給へ』イエス群衆の走り集るを見て穢れし靈を禁めて言ひたまふ、『噓にて耳聾したる靈よ、我なんぢに命ず、この子より出でよ、重ねて入るな』靈さげびて甚しく療撃けさせて出でしに、その子、死人の如くなりたれば、多くの者これを死にたりと言ふ。イエスその手を執りて起し給へば立てり。イエス家に入り給ひしとき、弟子たち窺かに問ふ『我らいかなれば遂ひ出し得ざりしか』答へ給ふ、『この類は祈りに由らざれば如何にすとも出でざるなり』

この一章中、『爲し得ばと言ふか、信する者には、凡ての事なし得らるゝなり』と云ふ一句は、實に深い信念から湧出した注意すべき一句ではあるまいか。信する者にとつて不可能なる事はあり得ない。唯一の不可能事は神の意志に反する行爲あるのみである。

8) 盲人の全癒。

「ルカ傳」第十八章を見よ。そこには次の如く録されてゐるのを見ることが出来る。

イエス、エリコに近づき給ふとき、一人の盲人、路の傍に坐して、物乞ひ居たりしが、群衆の過ぐるを聞きて、その何事なるかを問ふ。人々ナザレのイエスの過ぎたまふ由を告げたれば、盲人呼ばはりて言ふ、『ダビデの子イエスよ、我を憫れみ給へ』先立ち往く者ども、彼を禁めて黙さしめんと爲たれど、増々叫びて言ふ、『ダビデの子よ、我を憫れみ給へ』イエス立ちどまり盲人を連れ來るべきことを命じ給ふ。かれ近づきたればイエス問ひ給ふ『わが汝に何を爲さんことを望むか』彼いふ、『主よ、見えんことなり』イエス彼に『見ることを得よ、なんぢの信仰なんぢを救へり』と言ひ給へば、立刻に見ることを得、神を崇めてイエスに従ふ。民みな之を見て神を讚美せり。

エリコの盲人に就ては「マルコ傳」も「マタイ傳」もこれを録してゐるが、「マタイ傳」にはこの盲人が二人として記されてゐる。

更にこのエリコの盲人の他にも、盲人を癒した奇蹟は多く書かれてゐる。即ち、「ヨハネ傳」の第九章には、生れつきの盲人の眼の開いたことが載せられてゐる。

イエス道往く時、生れながらの盲人を見給へたれば、弟子たち問ひて言ふ、『ラビ、この人の盲人

にて生れしは、誰の罪によるぞ、己のか、親のか』イエス答へ給ふ『この人の罪にも親の罪にもあらず、ただ彼の上に神の業の顯はれん爲なり、我を遣はし給へし者の業を我ら畫の間になさざる可からず。夜きたらん、その時は誰も働くこと能はず。われ世にある間は世の光なり』かく言ひて地に唾し、唾にて泥をつくり、之を盲人の目にぬりて言ひ給ふ『ゆきてシロアムの池にて洗へ』乃ち往きて洗ひたれば、見ゆることを得て歸れり。こゝに隣り人および前に彼の乞食なるを見し者ども云ふ『この人は坐して物乞ひ居たるにあらずや』或人は『夫なり』と言ひ、或人は『否たゞ似たるなり』といふ。かの者『われは夫なり』と言ひたれば人々いふ云々。

こゝに於ては先の只言葉によつたのと異つて、唾で作つた泥を眼に塗つてこれを池水で洗はせてゐる。更に「マルコ傳」にのみ記されてゐるものを見るに、

彼ら遂にベツサイダに到る。人々、盲人をイエスに連れ來りて、觸り給はんことを願ふ。イエス盲人の手をとりて、村の外に連れ行き、その眼に唾し、御手をあて、『何か見ゆるか』と問ひ給へば見上げて言ふ、『人を見る、それは櫛の如き物の歩くが見ゆ』また御手をその目にあて給へば、視凝めたるに、癒えて凡てのもの明かに見えたり。斯くて『村にも入るな』と言ひて、その家に歸し給へり。

とあつて、茲でも異つてゐる。

(9) 聖者聞く。

イエス又ツロの地方を去りて、シドンを過ぎデカポリスの地方を経て、ガリラヤの海に來り給ふ。人々耳聾にして物言ふこと難き者を連れ來りて、之に手をおき給はんことを願ふ。イエス群集の中より、彼をひとり連れ出し、その兩耳に指をさし入れ、また唾して其の舌に觸り、天を仰ぎて歎じ、その人に對ひて、『エピタ』と言ひ給ふ。ひらけよとの意なり。斯くてその耳ひらけ舌のもつれ直ちにとけて、正しく物いへり。イエス誰にも告ぐるなど人々を戒め給ふ。然れど戒むるほど反つて愈々言ひ弘めたり云々。

以上は「マルコ傳」のみに記載されてゐる奇蹟であつて、同書第七章にあるが、一行に滿たぬものは、この外にも諸處に散見される。而して、次のものは耳の聾したものではないが、矢張り耳に關するもので、異種に屬するものであるから擧げねばならぬ。即ち、「ルカ傳」の第二十二章に在る。

それはイエスが橄欖山上に於て悲哀と寂寥とにおそはれ、汗をしたまらし乍ら天なる神に祈つた後、弟子たちの前に行つてみると、弟子たちは、みな悲しい力ない眠りを眠つてゐた。で、彼等を目さまして祈らしめ、猶いろ／＼と物語つて居つたところへ、どや／＼と騒々しい足音をたてて乍ら群衆

がやつて来た。見ると先頭に立つてゐるのはエスカリオテのユダである。

ユダはイエスに接吻しようとして近付いたが、イエスはそれを拒み、

『ユダ、汝は接吻をもて人の子を賣るか』

と責めた。傍にゐる者どもが事の及ばんとするのを見て

『主よ、われら劍をもて撃つべきか』

と尋ねたが、それと同時に中の一人が、いきなり一人の男の耳をバサリと切り落して終つた。被害

者は大祭司の僕であつた。

イエス答へて言ひ給ふ、『之にてゆるせ』而して僕の耳に手をつけて癒し給ふ云々。

『ヨハネ傳によると、この僕は名をマルコスと云ひ、加害者はシモン・ペテロであつたと云ふ。

(10) 遠距離に在つて癒した話。

この癒された者は身分高き者であつたが、この奇蹟は種々の點で「マタイ傳」の第八章にある、百夫長の僕の癒された話に類似してゐるから、先づこれを掲げると、

イエス、カペナウムに入り給ひしとき、百夫長來りて請ひて言ふ、『主よ、わが僕、中風を病み、

家に臥しゐて甚く苦しめり』イエス言ひ給ふ、『われ、行きて醫さん』百夫長こたへて言ふ、『主よ

我は汝をわが屋根の下に入れ奉るに足らぬ者なり、たゞ御言をのみ給へ。さらば我が僕はいえん。我みづから權威の下にある者なるに、我が下にまた兵卒ありて、此に「ゆけ」と言へば往き、彼に「きたれ」と言へば來り、わが僕に「これを爲せ」といへば爲すなり』イエス聞きて怪み、從へる人々に言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、多くの人、東より西より來り、アブラハム、イサク、ヤコブとともに天國の宴につき、御國の子らは外の暗きに逐ひ出され、そこにて哀哭、切齒することあらん』イエス百夫長に『ゆけ、汝の信するごとく汝になれ』と言ひ給へば、このとき僕はいたり。

さて、次に癒された貴族の子の話を探つてみよう。

イエス復ガリラヤのカナに往き給ふ、こゝは先に水を葡萄酒になし給ひし處なり。時に王の近臣あり、その子カペナウムにて病みゐたれば、イエスのユダヤよりガリラヤに來り給へるを聞き、御許にゆきてカペナウムに下り、その子を醫さんことを請ふ。子は死ぬるばかりなりしなり。爰にイエス言ひ給ふ『なんぢら微と不思議とを見ずば信ぜじ』近臣いふ『主よ、わが子の死なぬ間にくだり給へ』イエス言ひ給ふ『かへれ、汝の子は生くるなり』彼はイエスの言ひ給へしことを信じて歸りしが、下る途中、僕ども往き遇ひて、その子の生きたることを告ぐ。その癒えはじめ

し時を問ひしに、『昨日の第七時に熱去れり』といふ。父その時の、イエスが『なんぢの子は生くるなり』と言ひ給ひし時と同じきことを知り、而して己も家の者もみな信じたり。是はイエス、ガリラヤに往きて爲し給へる第二の徴なり。

(11) 啞を癒す。

「マタイ傳」の第九章に

盲人どもの出づる時、視よ、人々、悪鬼に憑かれたる啞者を御許につれきたる。悪鬼追ひいだされて啞者ものいひたれば、群衆あやしみていふ『かゝる事は未だイスラエルの中に顯れざりき』然るにパリサイ人いふ『かれは悪鬼の首によりて悪鬼を逐ひ出すなり』

とあり、更に同書第十二章には

こゝに悪鬼に憑かれたる盲人の啞者を御許に連れ來りたれば、之を醫して啞者の物云ひ、見ゆるやうに爲したまひぬ。群衆みな驚きて言ふ『これはダビデの子にあらぬか』然るにパリサイ人ききて言ふ『この人、悪鬼の首ベルゼブルによらでは悪鬼を逐ひ出すことなし』イエス彼らの思ひを知りて言ひ給ふ『すべて分れ争ふ國は辱るび、分れ争ふ町また家はたゞず、サタンもレサタンを逐ひ出さば、自ら分れ争ふなり、さらばその國いかで立つべき。我もしベルゼブルによりて惡

鬼を逐ひ出さば、汝らの子は誰によりて之を逐ひ出すか。この故に彼らは汝らの審判人となるべし。然れど我もし神の靈によりて悪鬼を逐ひ出さば、神の國は既に汝らに到れるなり云々』ある人はこれを同一の奇蹟の反覆であると云ふのであるが如何であらうか。私はこれは異つた二ツの奇蹟として見たい。二ツの間には相當の時日の相違があると見ねばならぬ故である。

而して、これは又ベツサイダの盲人を癒した話（上掲参照）と起源が同じであると云ふ説者のある事を附言して置く。

(12) 三十八年間の長病を一瞬に癒した奇蹟。

爰に三十八年、病になやむ人ありしがイエスその臥し居るを見、かつその病の久しきを知り、之に『なんぢ癒えんことを願ふか』と言ひ給へば、病める者こたふ『主よ、水の動くとき、我を池に在るゝ者なし、我が往くほどに他の人、さきだち下るなり』イエス言ひ給ふ『起きよ、床を取りあげて歩め』この人たゞちに癒え、床を取りあげて歩めり。

以上は「ヨハネ傳」第四章にある。

これまでに私はイエスの行つた征病的奇蹟の代表的なる物を述べ終つたが、もとよりこれは單に代表的なるものであつて、彼が行つた奇蹟の凡てではない。ラザロ及びヤイロの少女の死よりの甦りに

類似した廻りはこの他にもナインの寡婦の子の廻りがあり、その他の上掲の病の治療にも、夫々他の例を擧げることが出来るのである。

征病的奇蹟の外にも、クリストは多くの奇蹟を現したことが録されてゐる。即ち、イエスがベクニアからエルサレムへ歸る時、飢えたので、路傍にあつた無花果に實があるかと思つて見たが、葉ばかりだつたので

『これからは實を結ぶな』

と呪つたところが、翌朝になつてみると、その木が根元から枯れてゐたと云ふ話の如き、又、ある夕暮、弟子と共に舟につてゐた時、俄然颶風が起つて、舟を擧弄し始めた。丁度イエスは休んでゐたが、弟子達はいづれも怖れおのゝいて彼を呼び起した。目醒めた彼は風を叱咤し、海をいましめたところが、嵐はなりをひそめた如き自然に對してなされたる奇蹟。

イエス弟子たちを召して言ひ給ふ『われ此の群衆をあはれむ、既に三日われと借にをりて食ふべき物なし。飢えたるまゝにて歸らしむるを好まず、恐らくは途にて疲れ果てん』弟子たち言ふ『この疲しき地にて、斯く大なる群衆を飽かしむべき多くのパンを何處より得べき』イエス言ひ給ふ『パンは幾つあるか』彼らいふ『七ツ、また小さき魚すこしあり』イエス群衆に命じて地に坐せ

しめ、七ツのパンと魚とを取り、謝して之をさき、弟子たちに與へたまへば、弟子たち之を群衆に與ふ。凡ての人食らひて飽き、裂きたる餘りを拾ひしに、七ツの籃に滿ちたり。食ひし者は、女と子供とを除きて四千人なりき。イエス群衆をかへし、舟に乗りてマガダンの地方に往き給へり。と云ふが如き、更に

彼らカペナウムに到りし時、納金なまがねを集むる者ども、ペテロに來りて言ふ『なんぢらの師は納金を納めぬか』ペテロ『納む』と言ひ、頓とんて家に入りしに、逸いそ早くイエス言ひたまふ『シモン、いかに思ふか、世の王たちは税または貢を誰より取るか、己が子よりか、他の者よりか』ペテロ言ふ『ほかの者より』イエス言ひたまふ『されば子は自由なり。されど彼らを躓かせぬ爲に、海に往きて釣をたれ、初に上る魚をとれ、其の口をひらかば、銀貨一ツを得ん、それを取りて我と汝との爲に納めよ(マタイ傳第十七章)

の如き、又、

三日めにガリラヤのカナに婚禮ありて、イエスの母をここに居り、イエスも弟子たちと共に婚禮に招かれ給ふ。葡萄酒つきたれば、母、イエスに言ふ『かれらに葡萄酒なし』イエス言ひ給ふ『をんなよ、我と汝となにの關係けんがひあらんや、我が時は未だ來らず』母、僕どもに『何にても其の命す

る如くせよ」と言ひおく。彼處にユダヤ人の潔きよの例にしたがひて四五斗入の石甕六個ならべあり。イエス僕に「水を甕に滿せ」といひ給へば、口まで滿す。また言ひ給ふ「いま波み取りて饗宴長かみに持ちゆけ」乃ち持ち往きたり。饗宴長、葡萄酒になりたる水を管めて、その何處より来りしかを知らざれば（水を汲みし僕どもは知れり）新あらた郡を呼ぶ「おほよそ人は光づよき葡萄酒をいだし、酔のまわる望ほひ劣れるものを出すに、汝はよき葡萄酒を今まで留め置きたり」云々（ヨハネ傳第二章）

の如きも少くない。この最後の奇蹟は、イエスの行つた最初のものであると云はれてゐて、彼は先づこの奇蹟をカナに於て現して、最初の信徒を得たと云ふ。

併し乍ら、彼の最も多く行つた奇蹟は、疴病的奇蹟であつて、その他の奇蹟の約三倍の數が四福音書には録されてゐる。クリスト教の信仰者を集め得た最も有力なる原因が、この奇蹟にあつたことには疑ひがない。

クリスト自身としても、この疴病と云ふ事には、大きな力を注いでゐたことは、曠所に散見してゐるが、その一例を「ルカ傳」に採るに、その第九章を見よ、

イエス十二弟子を召し寄せて、もろ／＼の惡鬼を制し、病をいやす能力と權威とを興へ、また神

の國を宣傳こほすへしめ、人を醫さしむる爲に之を遣さんとして言ひ給ふ云々。

とあるを見ても明白であらう。この病が、肉體的疾病と共に、精神的疾病——惡を癒すことをも包含してゐるとしても、四福音書中に現れたるところを以てすれば、それが肉體的疾病に主きを置かれてゐたことは解し得らるゝ筈である。この點、日本に於ける新興の宗教、天理教の勃興と頗る類似してゐるやうに思はれる。

宗教的奇蹟に就て

宗教的奇蹟の否定論と肯定説の歴史

宗教的奇蹟に就て

それが如何なる宗教であるにせよ、凡ての宗教には必ず多少の奇蹟が傳へられてゐる。「奇蹟」は異常なものである。そして人は異常なる事又は物に向つて驚異を感じ、畏怖の念を抱かずには居られないものであるから、その奇蹟を行つた人々は必然的に人々の驚異と畏怖と、そして又傾倒とを受ける。宗教の開祖と呼ばれてゐる人々の凡ては皆さうであつた。

かうした傾向は古代原始民族に於ては特に著しかつた。古代に於ては、奇蹟——超自然的、驚異的な事實は、「神」の存在の顯證として認められてゐたのである。これは單にそれが尋常を超えた巨大なる石、又は樹木、さうした物さへも、何の疑ひもなく信仰の對象となることの出来た事實によつても明かであらう。

かくて奇蹟は信仰をより深めさせた。キリスト教は特に奇蹟が信仰の中心を形造つてゐるかの觀がある。開祖キリストが傳道生活に入つてから處刑されるまでの極く短い期間の間に現した奇蹟の凡てを誌したならば、世界もこれを載せるに狭過ぎるとさへ傳記者は云つてゐる。そして傳記者達はいつ

れもその幾十かを記録することを忘れなかつた。

クリストは、ある時は病者を癒し、悪鬼を追出し、ある時は湖上を歩み、水を酒に變じた。更に又一旦生命を失つたラザロを甦らしめ、又五箇のパンと二つの魚とを以て四千人に喰はしめ、然もその全部の人々の腹を満した。かゝる奇蹟的行爲は、ともすれば壞れんとする使徒達の態度を緊張せしめた。而して、その態度を決定的に眞摯ならしめ、自らの血を流し、肉をそがるゝことをも敢て辭しないまでの熱情を抱かせたのは、彼の復活ではなかつたか。少くともそれ以前の使徒達にはまだ、臆病風が吹いて居たのであつた。自分の身に危険が迫つたのを知ると、彼等は「ソノ」と犬のやうに逃出しさへして居たのであつた。

併し最後の復活は、使徒をして、眞にイエスはメシアなりと信じさせて終つた。彼等は墓から甦つたクリストの姿を見た。彼等は心から信じた。イエスは神の子也と固く信じた。かくて、彼等に無限の力を興へると同時に、その教旨にも確乎とした根柢を附與するに至つた。

實にクリスト教の中心は、奇蹟に置かれてゐたと云つても過ちではないのである。

この奇蹟に就てクリスト教國內に於いては、永い間賛否の論が交ちへられて來た。ある人々は奇蹟は存在すると云ひ、ある人々は奇蹟は存在し得ないと主張した。三世紀の頃でさへ既にケルスス對オ

リゲネスの論争があつたのであるから、この兩説の歴史は随分古いもので、と云ふより、寧ろ、クリスト在世時代、既に、パリサイの徒はこれを否定し、信徒及びその他の人々はこれを肯定したのであるから、正にこの兩説の争ひはクリスト在世當時からの争ひであるとも云ふことが出来るわけなのである。

凡ての巨大なるもの——その裡にさへ萬有をしろしめす神の姿を認めずには居られなかつた古代人には、併し一般的に云へば、奇蹟は存在するものと認められ、それが信仰へ導き入る道とさへなつてゐたことは否めないであらう。當時にあつては、奇蹟とは神の出現であつたのである。神は全能である、神にとつて不可能なることはあり得ない、その意志は無礙に發現する。かうした思想にとつて奇蹟は寧ろ自明の、明々白々、些の疑ひを挟む餘地のない實在であつたであらう。

思想は移つた。

今や全く變つて終つてゐるかの觀がある。以前には奇蹟は自明の理であつた。然るに今や、奇蹟で疑ひを挟まれぬものとは一ツもなくなつて終つた。現代人には眼前咫尺の間にそのあらはれを見てさへ、猶それが一の偶然的出來事としてしか認められないのである。一度ならず二度三度と見せ付けられてさへ、なほ、認めるに躊躇せずには居られないのである。より以上に、奇蹟の存在を信するこ

とは近代人にとつて一の恥辱であり、その無智を表明することになるとさへ思惟されるに到つてゐるのである。以前、奇蹟は信仰を深めるものであつた。そして今は、奇蹟は信仰を冷却せしめるものにならうとしてゐる。現代人にも宗教的欲求はある。併しその人々の大部分は、「奇蹟のない宗教」「合理的科學的なる宗教」を求めてゐる。

宗教的欲求に、かくも大きな動搖と變化とをもたらししたものは、勿論自然科學の急激な進歩であつた。自然科學は人々に對してより精緻なる自然への智識を與へ、自然の運行に現れる一定の法則を示した。

「奇蹟」とはこの一定の法則に合はぬものの謂であると思はれてゐる。現在にあつては、この法則に合はぬが故に不自然な、不合理なものであると思はれるのに無理はない。近代人は、自然法則を否定すれば、「奇蹟」を認められるが、これを否定せずしては、認め得なくなつてゐるのである。

自然法則と奇蹟とは矛盾する。もしも奇蹟を認めるとすれば、自然法則と矛盾しない道を見出す外はない。科學を如何に解釋したら奇蹟に存在餘地を與へることが出来るか、自然科學を放擲するか、奇蹟を否定するか、それとも又自然科學と矛盾しない奇蹟の新しい意味を見出すか——これ以外に採るべき決定的態度はなくなつてゐるのが現在であり、永い過去の状態であつた。

奇蹟否定説に就て

近代に於ける奇蹟否定説を述べるに先立つて、是非、誌さねばならないのは、千七百二十七年に發せられたウールストンの否定論であらう。

彼の攻撃には、特に際立つた學術的根據があるわけではなかつたが、六ヶ條に分たれたこの論文は奇蹟に對する實に辛辣を極めた凄じい、鋭利な批判であつたと云はれてゐる。

彼によると、奇蹟は一の事實として解釋するのは甚しい誤りで、これは象徴的比喩と看做すべきで象徴的比喩と看做さねば、如何様にも解くことが出来ないものとなる。彼は奇蹟の字句的解釋に對して鋭い、毒に満ちた批判を加へた後に、眞の奇蹟への理解は、只神祕的説明にあることを主張した。その文章は頗る粗野であり、又公平なる批評とは云ひ難いものであるが、併し、一の見方を教へたものとしての功績を没することは出来ない。

近代に於ける奇蹟否定説を述べるには、先づ第一にスピノーザを挙げねばならない。一六三二年に生れて一六七七年に歿したこの猶太人の哲學者は、自著の哲學書を幾何學書に做つて書いたことは主

著「エテイカ」を一見しても判る周知の事實であるから、かうした人物が奇蹟否定説を叫んだのに無理はないと云はねばならない。

一切萬有は、神の、整然として一糸亂れぬ決定的存在であり、奇蹟は自然に對する冒瀆である——これが彼の哲學的主張たる決定論を押し進めた奇蹟論である。彼によれば、神即自然であり、自然は常に必然でなければならず、自然に反する神は存在し得ない。彼は、千六百七十年、クリスト教が全歐の政治的中心を形造つてゐた時代に於て、奇蹟は神自らの本旨によつて行ひ得ないことであると云ふ結論を堂々と發表したのであつた。併し、この書は暫くたつて頒布を禁止された。

スピノーザに次いで否定論者として有名な者に哲學者ヒュームがある。彼はその著「悟性論」に、この否定説を展開した。彼はこの否定説を、彼の經驗論の上に建て

(1) 奇蹟の存在を肯定することは必然的に自然法則の破壊を意味する。

(2) 奇蹟は、その存在を充分に肯定せしむべき證差を持たない。

以上二ツを論據として展開してゐる。彼によるとすべての經驗は、一として自然法に據らぬものはない。而して奇蹟なるものが一の經驗的事實であるとするならば、それは在り得べからざるところの經驗と云はねばならぬ。奇蹟はこれを證明することが出来ない。これは認識的にも承認されねばなら

ぬことである。自然法則によらぬ經驗は一ツもなく、ない事を證明する事は結局出来ない。

奇蹟に對する證明よりも、如何に多くの反證がなされたであらう。誰が一體、奇蹟に對する反證よりも證明の方が多く、且つ正しいと斷言出来るか。吾等はその反證以上に有力な證明を何處にも見出すことが出来ないではないか。

以上がヒュームの否定説の大略である。

更に、ライマルスは、合理論によつて奇蹟を否定した。同様な立場に立つた否定論者で著名な人物にもう一人パウルスが在る。二人は共に「奇蹟のない宗教」——即ち合理的、自然科学的宗教の要求者であつた。

パウルスは、合理論者ではあつたが、原始クリスト教信徒及び、原始時代の人々が、奇蹟の存在を信じてゐたと云ふ事實は否定しなかつたが、その存在を信じたのは、彼等が無智であつたからに過ぎないと述べてゐるのである。そして彼は、奇蹟として認められた事實に合理的解釋を下して、以て迷妄から脱却せしめやうと企て、福音書の註釋書を書いたが、それによると、

(1) カナに於てイエスが水を酒に變じたこと云ふのは、水を酒に變じたのではなくて、その時偶々酒が盡きたので、イエスが新しい酒を取寄せたのである。

(2) イエスは湖の上を歩行したのではない、只海濱を歩いてゐたのである。
 (3) 天使のお告によつてマリアがイエスを懐胎したのではない。誰かゞ天使に假裝してアリアを犯したのである。

(4) イエスが盲者の眼を開けたのは、彼がその治療法を知つてゐたので、その法を施したにすぎない。

(5) ラザロは死から甦つたのではない。彼は一時的な氣絶から甦めたのである。

以上を見てもそれと判るやうに、パウルスは、かうした出来事があつた事は認めてゐるのであるが、併し、それを宗教的奇蹟として見ることをせず、これに一々科學的、合理的に解釋を與へたのであつた。

このパウルスの、事實の合理的解釋から更に一步を進めて、その歴史批評を試みる一派が生じて來た。この批評のスタートを切つたのは有名なシュトラウスである。

シュトラウスは、イエスに關する夥しい史料の中から、最も確實性のある史料のみを抽出して、それによつて最も確かなイエス傳を書かうとして、イエスの人格とその事業との裡には、一點たりとも超自然的、非科學的要素もあつてはならないと云ふ見解から、凡ての奇蹟的事實を驅除して終つた。

彼は、聖書が純粹な歴史書でないと云ふ事實を明かにし、福音書中の互に矛盾する出来事、舊約書から移入されたと認むべき記事、メシア思想の産出物等を批評して、奇蹟の歴史的證明を否定した。

彼によると、奇蹟は歴史的事實ではなくて、單に宗教的理想に胎された一種の神話にすぎない。それには、その發生にあつては、確かに深い宗教的意義があるにはあるが、併し歴史の根據は皆無である。——これが彼の説である。

奇蹟肯定論に就て

前に述べた如く、スピノーザはその決定論の上に、ヒュームはその經驗論の上に、パウルスはその合理論の上に、シュトラウスは歴史批判の上に、夫々奇蹟の否定説を展開した。併しこれは單に、特に有名な人々の否定説を掲げただけであつて、大體、哲學的、宗教學的否定説であるが、この外、多數の自然科學者は多くその自然科學の立場に立つて否定説を述べてゐる。もしも奇蹟の存在が肯定されるならば、保ち得る自然の大秩序と云ふもの、自然法則なるものは在り得ないわけになる。萬有が一定の法則によつて安らかなる存在を持續してゐるのは、自然が、一の奇蹟をも許容しないからであ

る——彼等の多くは皆かう云つた。

併し乍ら、自然科学者の中にも、特に科學バリエウを限定して、奇蹟を認めやうとする一派がある。ハックスレーがヒュームを論じてゐる一文を見てみる。彼は先づヒュームの合理的批評法を攻撃して、奇蹟に對する證明が至難、否不可能であると云ふだけの理由で、その存在を否定することは誤つてゐる。それは早計である以上に僭越であると云はねばならない。證明の不可能なのは、現在の智識によつて不可能であると云ふに過ぎないではないか。然も現在の人類の持つ智識が完全無上のものであると誰が斷言出来るか。その不完全なる智識を以て證明し得ないからと云つて、直ちにその存在をあたまたまから否定することが、誤りでなくて何であらう。ハックスレーはかうヒュームの批評法の根本を辯難した後、何時かは科學的にも奇蹟が證明される時が来るであらうと論じた。

ハックスレーと略々同一の見解を示した者にニューマンがある。併し乍ら、科學によつて證明される奇蹟は、驚異なき奇蹟であり、單に未知の自然的現象にすぎぬものとなるので、奇蹟に對する辯護であると同時に、最も根本的な否定であると云ふ説が成立つ——これは一考すべき問題であるが、これに就ては最後に於て私見を述べることにする。

純粹で力強い奇蹟の肯定者として、第一に挙げねばならないのは聖オウグステインである。オウグ

ステインは熱烈なる祈願によつて、自らの肉體の一部に、クリストが處刑の時に蒙つた所謂聖痕を蒙つたことは有名な話であるが、彼は、神意は萬物の根源をなすもので、奇蹟も亦その顯著なあらはれであると考へた。而して神のなし給ふことで自然ならぬものはなく、その意味で奇蹟も決して自然に反するものではない、皮相極る人間の五官には假令如何にうつらうとも、神にとつては凡てが自然であり、奇蹟も亦神の建てた大自然の秩序の中に加つてゐる。それは、餘りにも驚異すべきことである爲に、人間が自分の皮相な觀察を以て見てゐる自然に反するものと考へるにすぎない。奇蹟は神の力の一つのあらはれであると云ふのが彼の奇蹟觀であつた。

聖オウグステインの宗教的深さ、その偉大さを以てしても、頑迷なる自然科学一點張りの人々の思想を根柢から覆へすことは出来なかつたが、その代り、所謂「自然法則」とは如何なるものか、その限界はどこにあるか——これに對する論議が行はれ出した。

一體自然法則とは何であるかと云へば、これを簡約して云へば、過去の經驗した事柄を顧て、そこに共通するものを抽象して、それを最も簡單明白な一つの形式に統一したもの——換言すれば、經驗界の一般的法則であると云ふことが出来るのである。故にそれは、未來にも變りなく適應され得るのでなければならぬ。

科學者をして云はしめると、この法則を否定する事は、自然その物を否定する事になるのであつて、この法則の確立こそは、自然科学の究極目的であるわけなのだ。

併し、茲で一ツの疑問が生じて来ることは否めない。即ち、この法則が果して無限的性質を持つてゐるか如何かと云ふ疑ひである。現在の自然法則は永遠の未來にまで續くものであるか如何かと云ふ疑ひである。然も、現在に到るまでにも、自然法則であるとして一旦認められたものも、科學の發達によつて、法則として認め得なくなつたものが幾つもある。ニュートンによつて發見されて、永遠不滅の生命を持つものとして、永い間確認されて來た萬有引力の法則さへも、アインシュタインの「相對性原理」によれば、その確實性を失ふと謂はれる。この例を以てみても、現在の科學が永遠に變ることのない自然法則と認めてゐるものが、果して不變であるか如何か、疑ひなきを得なくなつて來るとすれば、現在の自然科学は、奇蹟の存在を否定することは出来なくなるわけである。

奇蹟が一般的經驗と合致せず、又その經驗の一樣性を破壊するからと云つて、單にそれだけの理由を以て奇蹟の存在を否定することの出来る筈があらうか。奇蹟が自然法則に反くものと云ふのは、自然科学者が認めた法則が、絶対に完全なものであることを必要條件としての上でなければ、斷言することは出来ないわけである。

以上の如き考へは、科學者の否定に對する最も力強い反言であると同時に、科學その物に對する強烈なる反對であると云ふことが出来る。而して、以上の考へは現在にあつては、宗教を批評することの出来るものは自然科学ではなく、科學を批評し檢討することの出来るものこそ宗教であることを闡明してゐるではないか。

併し乍ら、以上の如き考へは、奇蹟に對して消極的な辯護とはなつても、更に一步を進めた積極的證明となることは出来ない。と同時に、自然科学が極度の發達を遂げた曉に於ては、或ひは奇蹟が科學的に闡明されるやうになるであらうと云ふ豫想を抱かせ易い憾みがある。とすると、結極、ニューマンやハックスレーの意見と同一點に流れ落ちる結果になつて終ふのである。

茲に又次の如き説がある。その人々は、奇蹟の否定と肯定とは、「自然」に對する見解の相違によつて分れるものであると云ふ。

今までに度々現れた自然法則なるものは、要之、物質的自然に存するところの法則であつて、そこには少しも精神的要素が含まれて居らないのである。故に、自然なるものが、全く物質的のものであり、機械的なものであるならば、科學によつて否定された奇蹟とは、物質的、機械的自然に屬してはゐないと云ふにとゞまるわけであるが、果して自然とは、純物質的なものであるか、少しも精神的要

素を持たぬものであるか如何か、これが問題になつて来る。

科學者の云ふ自然には、少しも精神的要素を含んでゐない。故にこの自然觀をより擴充し、より深めたならば、奇蹟に對する觀念にも大きな變化が起らねばならない。何故と云ふに、科學者の否定してゐる奇蹟は、宗教的奇蹟ではなくて、科學的奇蹟であり、神の意志と力とを示す奇蹟ではなくて、自然を破壊する妖法に外ならないからである。

現在の自然法は神の自然法則の一部ではあるまいか。物質と精神と二にして一なる自然を吾々は今考へる。そして今の自然法則は、その一部でしかないと思へるのは誤りであらうか。今や吾々は物質界以外に、嚴として精神界の存在することを、認めずには居られぬのである。

自然が凡てに君臨するのではない、神こそ自然の支配者である。故に信仰を抱く人々にとつて奇蹟は一の眞理である——シユライエルマツヘルはかう考へた。又、「フアウスト」に於てゲーテは、奇蹟は信仰の寵兒である——と云つた。まことに、宗教的眞理の一切は、決して理智によつて認められるものではなく、信仰によつてのみ味到し得るものである。まことに、信仰を通して見た自然は、科學を通して見た自然とは全く異つて、生き生きとした生命の世界であらう。

又シユライエルマツヘルはその著「宗教論」に於て、次のやうな事を云つて居る。即ち、人々は、

只解釋することの出來ぬ驚異すべき異常事をのみ奇蹟と呼ぶけれども、自分の意味はそれとは異つてゐる。人々の心情が宗教的になればなるだけ、より多くの奇蹟を、到るところに見出すことが出来るやうになる。かくくの事件が、奇蹟と呼ぶことが出来るか如何かと云つたやうな論争の如きは、自分にとつては、それ等の論争者の宗教的官覺が、如何に貧しいかを示すまことに痛ましい感じを興へるだけである云々。

茲には、彼の宗教情操の豊かさがよく現れてゐるが、エマーソンは、全くこれと等しい思想を抱いてゐた。彼にとつて、自然のあらゆるものが奇蹟であつたと云ふことを、彼の「自然論」を読めば認めることが出来る筈である。

以上の見解には、深い信仰的情操が漲つてゐるが、所謂信仰者が、衷心より辯護したいと思つてゐる奇蹟は、かうした一般の奇蹟ではなくて、聖書に録された奇蹟、キリストが身を以て現した奇蹟でなければならぬ。即ち彼等の問題の中心をなすものは、奇蹟の性質ではなくて、聖書に録されてゐる奇蹟に對する歴史的證明、それが確かに行はれたと云ふことに對する證明に外ならないのである。これは單にキリスト教徒に限らず、古い傳統と歴史とを持つあらゆる宗教の信徒の、等しく求めてゐるところであることは明かであらう。

新興宗教の病理観

新興宗教の病理観

先にも述べたやうに、クリスト教と天理教との流布弘展の原因には一ツの重要な類似がある。即ち、信仰者が如何にして入信したかを搜つてみると、その大部分が、教義それ自身の持つ論理の整然さ、その論理的崇高感の直接的な滲透にあるのではなく、教祖及び最初期の信徒の現した奇蹟、特に征病的奇蹟にあるといふ點である。

では、何故に、それ程までに奇蹟的に疾病を根治し得たか、これはもとより教祖の牢乎として抜くべからざる不動不壊の信念と、そこから湧出す神與の、靈的能力によること勿論であるが、天理教には、特にそれが一般的可能性を、より多分に持つてゐることを認めずには居られないのである。

では、その一般的可能性がどこに在るか、その祕を捜るには、先づ第一に斯教の疾病観を説くのを捷徑とする。

元來この教は、個人の救済と、それが必然にもたらすであらう社會の救済を目的として生れたものである。而して個人を救済するには先づ各個人の持つ精神的疾患を醫さねばならない。然もその精神

的疾患を醫すことが、そのまま肉體的疾病の征服となつて現れて來るところに、この教の疾病觀の根本が在るのであるから、斯教の個人救濟、即ち社會救濟、世界救濟と疾病觀との間には實に密接なる有機的關係が在るのである。

その疾病觀は、教祖の言葉が、最も單純なる表現を以て、最も直接に道破してゐる。

- 1 なに／＼も病といふことさらになし心ちかひの道があるから
- 2 にち／＼におもふ心が身にさわる心のおんじが身のおんじ
- 3 にち／＼に身にさわりつくつくしんせ心ちがひを神がしらす
- 4 子のわづらひは親のわづらひ親のわづらひは子のわづらひ
- 5 ハツの理をよう思案せ、ハツの理がすみやかにさとりがついたら、身がはれる時節がある

この五ツの言葉によつてもこの教義の抱く疾病觀を知ることが出来るであらう。即ち、これを一言で云ひ盡すならば、疾病の凡てはその源を心に持つてゐると云ふことになるのである。人間天與の自由意志——心の積むハツのほこり。

- (1) 欲しい
- (2) 惜しい

(3) 可愛い

(4) 憎い

(6) 怨み

(6) 腹立ち

(7) 欲

(8) 高慢

これを「ハツ埃」と呼んでゐる。元來人間の靈魂そのものには、善惡の區別はないのであるが、與へられたる自由性の動きによつて善となり惡となつて現れて來るものと説かれてゐる。

埃と云へば、鏡の如く明かである筈の人間の靈を曇らせる心であつて

- (1) ほしいとは、自らの肉體と心とを働かすことを惜しみ乍ら、骨惜しみをし乍ら物を欲しが
不當な心

- (2) をしいとは、肉體の勞働と惡をなさざらんことを努むべき心の働きを怠り乍ら當然出すべき
物を惜しむ心

- (3) かはいとは、自分の身、自分の子、自分の家庭、かうした自分に最も直接に關係あるもの

みを愛する心

(4) に、く、いとは、自らのなせる身の誤りを思はずして、只自らの困惑にあへば、直ぐ人をにくむ心

(5) う、ら、みとは、凡て物事が自らの豫想通りにならぬからと云つて、他人をうらむ心

(6) は、ら、だ、ちとは、その心の狭小なるが爲めに、思ふまゝにならぬと云つては怒り立腹する心

(7) よ、くとは、邪悪なる心づかひよりして、自己中心的に事をなす心

(8) か、う、ま、んとは、自分以外の者を眼下に見下し、自分がより豪いと、事につきて高ぶる心

以上の八ツの埃が、あらゆる疾患となつて、夫々身體の内外にあらはれる。

埃は汚れたものである。それが蓄積されてゐれば塵だめである。かゝるところへは神は入込んでその働きをなし給はぬ。何故、清淨なる働きは清淨なるところでなされねばならぬからである。

人間の肉體は四百四病を容れる容器の如きものであると云ふ言葉がある。疾病にもいろ／＼あるが呼吸器病、消化器病より精神病にいたるまで、枚舉にいとまがない。而して、醫師によると一見如何に強壯に頑健に見える人間でも、仔細に、細部に亘つて、綿密に點検する時には、何處かに必ず何等かの疾患を持つてゐて、全く完全に健康體と誇り得る人は一人もないと云ふ。この事實は、人間が、

凡てそれ／＼に「八ツのほこり」を積み來つたことを物語つてゐるわけである。

疾病は凡て不快を伴ふ。それが如何なるものでも、愉快な、ほがらかな病と云ふものは一ツもあり得ない。その程度に差こそあれ、凡て不快と痛苦とを肉體と精神の上に興へるばかりではなく、疾病は人間の生命を直接におびやかすものであるから、古來、生きとし生ける人間は、凡て何等かの方法によつてこれを免れやうと努力して來た。その努力のあらはれが醫學であることは云ふまでもあるまい。それは立派な一ツの職業を生んだ。

釋迦もまた數へ上げた四苦の中にこの病苦を擧げてゐる。

偉大なる人々が、如何に死から、病苦から、逃れやうとして、飽くなき研究的努力を拂つたことであらう。不老不死の薬を求めらるるためになされた愚かなる人々の努力は、その愚かなるが故に深く我らの胸を打つ。

然も、幾千年の間、不斷に持續されてきたこの努力の結實は——とこれを想ふ時、人々は愨然として天を仰いで歎ずる外はない。幾千の幾萬の對病策は講ぜられた、而て現在も講じられつゝある。然も、その爲に疾病は減じたであらうか。否々、千度も否である。疾病の種類は次第に増加し、健康體は次第に減少する。世界は疾病の巢窟となつた。然も人々は醫學は著しい進歩を遂げたと稱してゐる。

何たる矛盾であらう。

醫學も藥物學も、左程進歩してゐなかつた時代には、人間は現在から見ても一般に長壽であつた。進歩と共に病人は増加し、一般に短命になつた。何と云ふ矛盾であらう。

人々は、次第に迫る生活苦と病苦、短命に對する不安の爲に全く恒心を失つて終つた。凡ての人々の心は不安である。常に動搖してゐる——これが現代である。

この状態にとつて、天理教の大膽な疾病觀は一の驚異であり、歡喜でなければならぬ。

やまひはつらいものなれど本をしりたるものはない

このたびまでは一列にやまひのものと知れなんだ

教祖は大膽に直裁にかう斷言した。醫學は病理を究極まで探究し、その病狀をもとに復する手段を講ずるものである。その醫學の黄金時代に、この言葉は、自然科学者にとつては、この上ない侮辱でなければならぬ。然もこの大膽にして卒直なる斷定は、これを事實より見るに、明かに侮辱ではなく、眞理であると認めざるを得ないのである。

ある人が胃に故障を感じて醫師を尋ね、診察を乞ふところが、その結果、醫師は、現代の醫學的智識から推して、これに胃擴張と云ふ病名を附した。そしてそれに對する醫藥を與へた上、この病症

は過飲から來てゐるのであるから、否、過食過飲の持続に源を發するのであるから、先づそれを慎み自分の與へる醫藥を服用せよ、而してその外にいろ／＼の注意を與へることを忘れないであらう。

併し乍ら、斯教では、その原因は、そんな卑近なところに原因があるのではなく、より深い精神に因を發してゐることを教へる。即ち、多欲にして飽くことを知らず、神の與へるもの、四圍の人々に不足を感じ續けて來た理がこの疾病の原因であると説明する。

しからば、胃に連結する腸の疾患は如何。人體に於て、腸は人道をシンボライズしてゐる。即ち腸の疾病を持つ人々は、必ず人倫の本道たる親子、兄弟、妻子、そのいづれか、又はその凡てか、又はその二三かの順序を誤つてゐる——病はそこに發すると説明する。

肛門の病は如何。これはしめく／＼りである。當然出さざるべからざるものを出さず、出すべからざるものを出す人々は、肛門の疾病にかゝる。

右は病の原因の二三を例に採つて説明したのであるが、かくも大膽に、病のものと心からと説き、病のものと知りたる者はないと斷定した人は、ないであらう。佛典に於ても、この理を説明してゐることは前にも述べたが、斯教ほどこの點を力説し、徹底的に説明を加へた宗教は他にないと云はねばならない。然もこの征病を世界救済の直接手段に選んだ點で、天理教は充分にその特異性を誇つても

鏡といふものは、元來、物象をその面にうつす外には、それ自身としては何等の意志をも持たず、何等自發的活動をもなさぬもので、面に物象を映すのも、映さんとする意志あつての結果ではない。人間の肉體はこの鏡に似てゐる。それ自身としては全く無意志であり、何等の自動的活動を起さぬもの、元來は一點の曇りもないものなのであるが、映る實體、即ち心に曇りがあり、ほこりがあれば、それをそのままに映し出す。而してその曇り、ほこりがなくなれば、鏡である肉體も、本來の明朗さに還るのである。

而して映じさせるのは神である。神の意志である。ある人があるほこりをつくる。と、神は、そのほこりが精神に附着したことを、その當人に知らしめる爲に、病として現すのである。

にち／＼に身にさわりつくつくしんせ心ちがひを神がしらす

教祖はかう云つてゐる。故に、斯教にあつては、肉體的精神的兩々の疾病を、病とは云はずして、特にこれを「神の御意見」又は「神の御手引き」と呼ぶ。又この故に病は悲しむべきものではなく、寧ろそこに神の意志を知り、自らの非を推理すべき機縁として感謝し喜ぶべきものとなすのである。人間は鏡を持つた猿の如きもので、只その鏡に映つた映象のみを見て、悲しみ、歎き、怒るのみで

あつて、その映象の實體には些しも介意しないのである。

疾病が、以上に述べた如く、神意のあらはれであるとするならば、病に種類のあるのは何故であるかと云ふことが問題になつて来るが、これはその心づかひの別、信仰の程度、等によつて差別が生ずると云ふ以上に説明出来ない。

疾病の種類は無數にある。昔は四百四病と云つてゐたが、現在ではそれ以上の數に及んでゐることは勿論であるが、斯教に於ては、これをその病狀輕重の程度に従つて、

(1) さわり

(2) やまひ

(3) 因縁病

の三種に分けてゐる。

(1) のさわりは、極めて輕微のものであつて、生命に危害を與へるやうな事のないもの。一言で云へば「輕い病氣」である。而して、これは調和破壊から起るもので、一家の調和を破つた場合には、心の平衡を失ひ、その結果として現れる。即ち、人と人との交渉が過つたり、間に間隙が生じたりするところから一時的に生ずるのであつて、決して「惡」があつて生ずるのではない。寧ろ過てる善意の

爲に生ずると云つた方がよい位のものであると云へる。

教祖はこのさわり程度の疾病をてびき、いけん、みちをせ等と呼んだ。

(2)のやまひ——これは上掲のさわりが一步進んだもので、やまひと比較して苦痛が激しく、又生命を犯すことが少くない。

而して先のさわりは過度の交渉とその分散より生ずるが如く、これは又夫々の事物に對する耽溺と孤僻より生ずるものであつて、これを教祖は、しこみ、ていれ、りつぶく等と呼んだ。即ち些かの意見などではなか／＼氣付かず、又心の建直しをせぬ故に、より嚴しき立腹から、より激しい苦痛を與へるのである。死は、これによつて猶その非を悟らず、懺悔一筋の心になり得ないところに與へられる。

(3)の因縁病は、やまひの更に甚しくなつて來たものであつて、これを精神的に云へば、埃となる心づかひが性格化されて終つたところに起るものである。盲目、肺病、肋膜炎、癩病、いざり、眼満その他であつて、多くは醫學的に遺傳又は傳染性の疾病とされてゐるもの又は所謂片輪である。

ところで茲に一ツの疑問が生ずる。即ち、やまひによつて死ぬ者に比較して、因縁病によつて死ぬ者は少ないと云ふのは何故であるかと云ふのがそれである。

併し茲にも神の攝理は炳乎として輝いてゐるのである。死ぬにも死ねず、生きるに生きられぬ、俗に云ふ蛇の生殺しの境遇に置かれる者が、最も不幸なる者である。故に因縁病が最も不幸なもので、人間に對する神の最後の手段なのである。教祖はこれを「さんねん」と呼んだ。

成程、心は病のもと、萬病は心づかひより起るとして、では、神であると云はれてゐる子供、今日まで如何に多くの偉大なる宗教家や詩人によつて、子供は神であると云はれて來てゐるのであるが、その小兒が何故疾病に犯されるのであらう——かうした疑ひが當然こゝに起らねばならない。

これに就ては次の如く説明されてゐる。子供自身には疾病の源となる心づかひはないが、これは両親の誤れる言行、心づかひを改めさせやう爲めの手段として神が特に子の肉體の上にさわりを與へられる。かくする事によつて最もよく親の心の建直しの必要を痛感せしめることが出來のからである。故に十五歳迄の子の病は親の、生來の不具者は一家の因縁、心づかひの理であると。

現在の醫學に於ては、微菌説がなか／＼に有力である。疾病には必ず夫々の微菌があつて、その菌の附着によつて發病し、その繁殖によつて病勢が昂進するとするのである。これに對して斯教では、病そのものが微菌によつて遺傳し、傳染するのではなくして、心の理が遺傳し傳染するのであると説明する。

人間の精神は、物質文明の發達に伴ふ生活の複雑性と共に、次第に複雑さを増して行く。人間の心は、些かの相手の動きにさへ直ちに捉へられて、それに對して反射的作用を示す。而してこの反射する心の度は、文明の進展につれて甚しくなるのである。

人間の心の複雑の度の甚しくなるに従つて、病の症狀、その數等も増加してゆく。次第に人間社會に病氣の種類の加つて行くことは、かうした事から説明すれば容易に説明出来るわけである。

而して、それが發明された當時に於ては卓絶にその效驗をあらはした醫藥物が、次第にその卓効を減じて行くと云ふことは、往々にして耳にするところである。何故さうなるか——それは、その藥品が、病源たる微生物に免疫性を與へた結果であると醫學者は説明するが、斯教の病理觀によつて説明するならば、その疫病の原因をなしてゐるほこりが、殆ど清め難い程度にまで人間の心を蝕んでゐることなるのである。梅毒性諸症に對するサルヴァルサンの注射液の効果などはこの適例である。

私は先に、七ツの難病を擧げて、それが「前生持越しの因縁病」であることを述べて置いた。就中癩病の如き、又は梅毒の第三期性に入つた所謂骨がらみの如き、又第三期性肺結核の如き、昂進せる脊髄病の如き、いづれも不治の業病と稱せられてゐる。

併し、これ等は果して不治であるか。その症狀にある人は完全に絶望する外ないのであるか。否々

かうした業病と雖も、その當人の精神が根本的に改造され、あらゆる欲望が拒まれるならば、必ず全快し得る。クリストも「信する者にとつて不可能なる事はない」と云つた。佛教に「大死」と云ふ語がある。千番に一番も生くる望みのない大死、この大死一番することが出来るならば、必ず朗らかな蒼空は現れる。何故と云ふに、先にも述べた如く、疾病は肉體それ自身にあるのではなく、精神のほこりが重つて疾病となるものであるからである。

併し征病の遲速は免れない。この遲速の差はその人自身の信仰と懺悔の程度に寄るのであり、精神改造の遲速によるのである。大死一番し得ず、徐々に進む外に進み得ない人は、治癒の速度も徐々たるを免れず、敢然一瞬にして自己改造を實現し得る人であるならば、その人が、如何に多くの疫病に蝕まれてゐたとしても、瞬間にして全快する。

惟ふに、斯教の信徒の中にさへ、この誤謬に心付かぬ人は多くあるであらうと思はれる事は、只肉體的疾病の治癒のみに焦慮して、何よりも先づ第一になすべき精神の改造を忘却してゐる事である。

『私は天理教を信じた。熱心に信仰した、欲も斷つた、献金もした。併し結核病はなほらずに終つた自分は損をした。』

かうした不満と怨嗟とを往々にして耳にするのは必ずしも私のみではあるまいと思ふ。併しまうし

た人々は、眞に斯教を信じたのではなかつた。斯教の本質を捉へた人ではなかつたのである。神をさへ信じなかつたのだと云つたならば、その人は必ず抗辯するであらう。では彼は何を信じたのであつたか。曰く、

自分が助かりたいと云ふ欲望

これを信じてゐたのである。献金することによつて欲を、ほこりを拭ひ去つたと思ふであらう。併し、些かなりとも未練執着のついた百萬の金よりも、神にとつては、眞實流露の一錢がより尊いのである。執着未練、八ツのほこりの一ツとして數へられてゐるところの「惜しい」の染着した百萬の献金は、献げざるに等しいのである。

又、さうした人々は、必ずや自らの病の如何にして生じたかの理を誤つてゐたかも知れない。教祖は、

なんぼ信心したとても心をちがひはならんぞへ

と教へてゐる。病は信仰と同時に理をあきらめることを必須の條件としてある。

神は理

理が神や

この理を眞に捕捉せずしては、病のもとを斷滅することは不可能也とされてゐることを忘れてはならない。

斯教は、往々にして病なほしの宗教として、拜み祈禱を主とする純他力的な、寧ろ迷信的な邪教の如く誤解されてゐる。今もなほこの誤解は、とけてゐるとは云へ得ないであらう。この點に就ても、教祖は既に次の如き言葉を殘してゐる。

この道は拜み祈禱の道ぢやない

この道は病なほしの道ぢやない

心なほしの道

因縁きりの道

即ち、征病は精神改造の結果として現れる附隨現象であるに過ぎないのである。

新興宗教の征病法

天理教祖の説いた大膽な、天啓的な、驚歎すべき疾病觀に就ては既に述べた。私はそこで、あらゆ

る疾病は心づかひから生ずること、八ツの埃から生ずることを説明した。而して、疾病はその埃が心に、各自の心に染着したと、染着してゐること、及び前生から附着して來てゐることを報せる神の御手引であることを説明した。

併し、より以上に驚異すべきは、その一般論ではなくして、個々の疾病に對する原因の探究にある。即ち、如何なる心づかひが如何なる疾病となつて肉體——鏡面に現れるかと云ふことであり、それを征服するには、如何なる方法をとるか——茲にこそ眞に獨自なるものがある。

私は表題に「征病法」なる文字を置いた。併しこれは單なる征病法とか強健法とか、或は又無病長壽法とか稱すべきものではなく、一の宰として抜く可からざる人生觀の確立であり、高く遙かなる理想境への精進であり、人は如何に生くべきかの問題に對する適切なる解決である。

以下に述べることを、讀者は、單なる征病法とのみ解してはならない。それは自分自身の心への鞭であり、幸福——本質的なる——の把握への過程であり、廣義なる國家主義への躍進であり、更に心と心との連結を以てする人類平和への展開である。これを教祖は、

せかい一れつ

と云つた。天理教的征病法ではなく、世界一列の救済法であることを念頭に置いて、而して熟讀さ

れることを希はねばならない。

併し、又茲で一言せねばならぬ事がある。それは、疾病の源をなしてゐる心づかひ、如何なる疾病は如何なる心づかひより起るかと云ふことに就ては、これを概括的に、一般的に述べる外に方法のない事である。即ち、ある人の疫病を見て、

これはこの心づかひから

と斷定し得ない事である。何故であらう。

神は、その人自身の信仰の如何、神に如何に近く在るか、遠くあるかに依つて、異つた症状をお示しになる。卑近な例をとつて説明すれば、赤兒には如何に説明しても判らないが、十歳の子には十歳の子としての理解が出來てゐるし、十五歳の子には十五歳の子としての理解が出來てゐると同じく、無信仰の人には神の意志表示も結局それが何であるかは全く判らないが、些かでも信仰を持つ人にはその程度によつて、些かでも神意を推知することが出来る。更にある程度まで信仰に進んでゐる人ならば、より確かに推知することが出来るわけである。

故に、その程度によつて御手引は夫々に異なるのである。

又、信仰に入つたばかりの人、又は信仰に入る可能性を多分に持つ人であるならば、假令その疫病

が如何なる心づかひから生じてゐるか、どの心づかひから生じてゐるかを知ることがなくとも猶、信仰のみによつて全治し得るのであるが、それが入信後相當の時日を経過し、教義に就ても相當の理解が出来てゐる人になると、明確に、どの心づかひがこれの源をなしてゐるか——その理が明確に理解され、それが完全に懺悔されねば、全快はしなくなる。これは人間の社會に於ても、知らずになした罪は左程でなくとも、知り乍ら行つた罪はより重く視られるのと同じの理に基いてゐることは推するに難くない。

更に又、同じ心づかひでも、その程度は、各自の性格や、その場合々々の状況や、その他によつて夫々に異なるものである。例へば二人の人が口論をするとする。而して同座に第三者が混つて居たとする。二人の口論者は次第に論議に捉はれ感情的になり、結論の相異から等しく相手に憎悪を感じ出すとする。その時第三者が仲裁に這入つた。這入つたはいゝがその第三者が甲なら甲、乙なら乙へ些かでも傾いた仲裁をするならば、他の一方は、その第三者にまで憎悪を及ぼすことになるであらう。そしてその憎悪感、他の二人に比して遙かに深刻なものとなるであらう。

かゝる場合、同じ憎悪感と雖も、その程度によつて現れかたは異なる。恰も、同じ發熱にも三十八度の發熱もあり四十一度の發熱もあり、二三時間或は一日で引く熱もあり、十日二週間と永引く熱もあ

るが如きものであり、これを病名より見れば、軽度の風邪も、赤痢チブスの如きも、發熱と云ふ點に於ては同一なのである。

故に、あらゆる場合を綜合して些の誤りなしと云ふ疾病測定の法則と云つてはない。夫々の信仰、境遇、性格等によつて異つて來るけれども、その底には一貫した何物かがある。我等は先づこれを知らねばならない。この底流するものを知ることによつて、表流するものを推すことを心掛けることを必要とすると思はれるのである。

故に私は以下に於て一々の疾病は如何にして、如何なる心づかひが因をなして生じたかを第一に説明し、次にこれが征病法を述べやうと思ふ。

精 神 病

この精神病にもその症狀によつて種々の名稱がある。誇大妄想狂は常に誇大なる妄想を腦中に描き、色情狂は色情的なる事物に極度の興味を感じる。矢鱈に弄火する放火狂、殺人に無限の興味を感じる殺人狂——等々々、數へ上げればかなりの數に上るであらうが、大體に於て、一方に偏する點に共通

點があると云へば云へるが、これは單に精神病者にのみ現れる傾向ではなく、同時に小兒、天才等の言行にも現れる。

由來、天才と狂人との間には殆ど差異と稱すべき程のものがないと言はれてゐる。有名なユダヤの法醫學者にして犯罪學を大成したロンブローゾの「天才論」を見ると、彼は種々なる例證を擧げて天才と狂人との比較を行つてゐる。而して我等はこの書を読んで、彼が如何に各方面の文獻を博く涉獵したか、如何にその中から多くの例證を見出したか、その例證を如何に巧みに綜合分類したかに驚歎せざるを得ないのであるが、同時に然らば天才とは何ぞや、天才と狂人との差異は如何——と云ふ最後の問題に對しては、殆ど何等の解答をも與へてゐないことに心付くのである。

併し私は今茲で天才と狂人とに就て語らうとするのではない。若しこの問題に對する、最も單純にして然も力強い解答を望む人があるならば、私は敢てシヨウベンハウエルの主著「意志と認識としての世界」中の一章「天才に就て」の一讀をお勧めするにとゞめて置かねばならない。

閑話休題。

いづれにしても精神病の因つて來る原因は、他の些かなる病に比して遙かに深い、大きいもので、一の業病と認むべきであることに異論はあるまい。埃に大小深淺はない、同じくこれ罪惡也と云つて

も、精神病の因となる埃は尋常一穢の心づかひや行狀ではなく、その埃を積んだ當人の一生にとつても最も重大な一ツの事件を成したものに相違ないのである。

而してその現れ方によつて、即ち精神病の種類によつて各自その因縁を異にすることは勿論であるが、この疾病は中風症などは反對に、青年又は未成年者に多くあらはれて、老年者に甚だ稀れである事より推せば、該病は、各自々身の心づかひは勿論であるが、より以上、先祖よりの持越しの、子孫に現れるものであるやうに思はれる。

先づ精神病者の現れた家を仔細に調べてみると、一人、二人、甚だしきは三人もの者が同病に犯されてゐることは少くない。又、その時には現れてゐなくとも、二代三代以前とか、父系又は母系の親戚關係の家庭などに現れたことを知ることが出来るであらう。この點より見ても持越しの理のあらはれを多分に持つてゐることが推斷出来るわけである。而して、この事實を言葉を換へて云へば、その病人を犠牲として、一家一門の積んで來た恐るべき因縁を、神が示し給ふのである。

精神は、神が人間に與へた唯一の自由用のものである。それが全く錯亂するのであるから、正しく宇宙の天真に極端に逆行し、それが結果として對者の心を極度に迷はしめ歎かしめ悲ましめ、狂せしめんとした事は疑ひを容れぬところであるが、さて、では如何なる心づかひが、その因をなして居る

であらうか。

惟ふに、天の理、大我に反するものは人間の小我である。利己的な心づかひである。故に該病になやむ人は極端なる自我性を持つてゐるか、又はその自我性を極端に現した人かを先祖に持つてゐるかしてゐると思ふ。然も、その誤つた行爲を少しも非と悟らぬのみならず、一步を進めて、それが當然であると認め、罪惡をも可とした。

然も主義を主張するに當つては飽くまで執拗に、他人を怨み憎み、これに報復するや徹底的である。もとが亂れる(心が錯亂する)のであるから、彼又は彼の先祖は、いづれも親に對して不孝、主を尊ばずして倒して顧す、恩を仇でかへし、養ふべきを養はず、立てべきを立てず、對者に云ふべからざる善機を與へた。色情、金錢、縁談、相繼等の事で、かうした木道に逆行した事をなした人、そうした人を祖先に持つ人が、因縁に迫られて發狂するものと見て誤りない。

自身も二度狂的になつた事がある。而して父も祖父も我執の強い人であつたが、父は死の五六年以前から、一變して佛の如き人になり、念佛を稱へつゝ往生した。

私の親戚には私の外にも二人の狂者があつた。一人は父方の甥であり、一人は母方の伯父であるが一人は座敷牢中に憤死し、一人は現在にいたるも狂態を盡してゐる。

神は因縁の似たものをお寄せ下さるといふ、妻の妹は矢張り發狂した。かうした事實を綜合して考へる時、私は心中ひそかに神意の測り知るべからざる顯現に打たれるのである。七ヶ年間反對に反對を重ねて來乍ら、然も今や一人の貧しき信徒として、かく筆を採つてゐるのも、單なる偶然ではなくして、昭々としてしろしめす神の心のあらはれ、必然の結果であることを沁々身にしみ感ぜざるを得ない私である。

この精神病の因縁は、單に「ほしい」とか「可愛い」とか又は「惜しい」とか云ふやうな單純なものではない。その一層深刻なるものである。只さう感ずるのみではなく、ある謀計を以て對者を陥れるとか、陥れるのみでは飽足れりとなせず、遂ひに對者をして變死せしむるとか、さうした事、又はこれを色情的なる例に云へば、未だ自分に對して熱烈な戀情を抱き、その身を獻げてゐる相手、自らの都合のみを考へてこれを捨て、その爲めに對手が世を果敢んで自殺する等、これである。世に「女の一念」と云ふ。その怨みの深刻なる感情は、最も激しい因縁として、残ることは争はれない。

然らば、かゝる精神病患者は如何にして治す可きか。先づこれを説く前に、天理教の持つ征病の一般的方法を述べやう。

凡ての疾病は心づかひ、八ツの埃から生ずる事は前に述べた。然らばこれを如何にすれば征服し得るか。これを一言にして云へば自己征服である。即ち、一の疫病が何に由來するかをよく熟考し、正にこれが、この心づかひが因をなしてゐると悟了したならば、心の底よりその心づかひをなしたことを神に懺悔し、もしその心づかひの因をなした人があるならば、心にふかくその對者に詫び、自らの到らざることを自知する——單にこれである。その因の理を悟了する事、明かに突きとめること、これが第一。そのつきとめた埃を積んだ心を神に懺悔すること、これが第二。

人々は、讀者は、これを聞いて果然とするであらう。無理もない事である。併し乍ら私は茲に斷乎として警告する。もしもこの二ツが完全に、各自の心の底からなされたならば、如何なる業病と雖も、必ず快癒せざるといふことはない。若し、猶快復せぬ人があるならば、上掲の二條件の内のいづれかに誤りか不足があると見ねばならない。

私は、何故、この本論に入る前に、四福音書、佛典に現れたる奇蹟的征病の事實、及び天理教祖及びその信徒によつてなされたる奇蹟的征病の事實を、飽くことなく並べたか。私はそれ等の一として事實あり得ざるのではなく、事實あり得たものであることを言はんとし、自らの言葉をより力強からしめんとして敢て並べたのである。死者の甦りさへもあり得ない事ではないのである。

『汝の信仰汝を癒せり！』

イエスは幾度となくかく言つてゐる。而して信仰は、廣大無邊の力である。

これを教義上から説明すれば、肉體は鏡である。肉體それ自身には何等の意志もないのであるが、埃がそこに染着すれば曇る。その埃が疾病なのであるから、埃さへ拭ひとられるならば、鏡はもとの如く明朗となり、肉體はもとの如く健康となる理である。

この單純の持つ力——人々はこの力を信ぜねばならぬ。

併し乍ら、精神病者は、彼自身としては、精神の改造、懺悔一條等、これを悟る能力が全く失はれて終つてゐる。故にこれは、その家族、親戚等、病者の因は凡て我等にありと悟る可きである。而してそれまでの驕恣より起る諸々の心づかひを根本的に懺悔し、大道に逆行せる言行を改め、天の理法に従ひ、順を守るやう自らの心を統一し、他人に對するに寛恕を旨とし、神思に報ゆることを誓ひ、一日もこれを怠つてはならない。

否、これでは猶足らない。この病者によつて、恐るべき一家一族の因縁を示し給ふ神の深き心を悟り、今にしてこれを示し給ふことを感謝し、進んでこれを喜ぶに到らねばならない。

更に、他に對して寛恕では猶足らない。それまでの罪の償ひとして、どん底の道、誰よりも一番下

の道を通らねばならない。些かなりとも他人に不満を抱かず、親鸞上人が自身を「極重悪人也」と云つたその心持を心持とせねばならない。

凡ての事物を人間を標準として思考せず、凡て神を標準とせねばならない。色慾に溺れるのも、人間としては無理ならぬ事である。人間に欲のない人間はない、だからと云つて欲を當然のものと考えへてはいけない。人間より見れば欲は人間本然の要求である。併しこれを神より見る時、欲は罪惡である。親鸞上人の如き一代の聖者が、どうして極重悪人であらう。併し上人は、佛を標準として自分を省る時、自身を極重悪人と呼び、自ら責めずには居られなかつたのである。

この心を心とせよ。精神病は、他の病に比してその因は深い。故に眞に大死一番、自らを極重悪人也と観じて懺悔精進する心なくしては、その因を拭ひ去ることは不可能であると云はねばならない。佛語にも「死中活を求む」と云ふ言葉がある。「大死」と言ふ言葉がある。これである。共に根本的自己精神の改造を云つた言葉である。

眞にその非を悟つてこれを懺悔し、神の指示を喜ぶならば、必ずや如何なる精神病も全快する。疑ひなき事實である。

中風症

中風症は、男女の如何にかゝはらず、からだの右とか左とかが不随となつて、自由用を失つて終ふもので、重いになると全身不随を來す。そこに輕重の差はあるが、腦の血管に故障を來す疾病である。腦の血管が破裂するのである。

腦は人體の最高部を占めてゐる。その血管が破れるのである。破れるのは切れる理と云はれてゐる。

而して中風症と云ふものは、壯年時代に現れるのは少く、多く中年又は中年以後に現れるものであるから、これは前世から持越しの病ではなくして、現世にあつてなされた埃のあらはれと見る可きであると思ふ。

では八ツの埃のうちどの埃のあらはれであるかと云へば、惟ふに

- (1) かわい (可愛い)
- (2) よ く (欲)

(3) こうまん (高慢)

八四

この三ツの埃が因となつてゐると思はれる。即ちこれを詳説すると、

(1)の可愛いは吾が身可愛いの心である。偏愛邪愛である。自分の慾の欲するまゝに行ひ、自己利益の爲には他の災厄も顧みず、自分が立ちさへすれば他人は倒れても介意せぬ。時としては親の身として子をさへ倒して敢て顧みない。又、繼父繼母の場合には、他人即ち先妻先夫の子は憎く、これを厄介者扱ひ以上に虐遇し、我が子のみを甘やかす。他人をどしどし踏臺にして自己の榮達をのみ心掛ける。我れ一人の功成れば、萬骨の枯るゝを顧みない。これ凡て偏愛であり邪愛である。他人を倒せば我が身が倒れる。

又、斯教に於ては、國常立尊は身内の水氣の守護神、面足命は身内のぬくみの守護神とされてゐる。而してこの水氣と濫みとを等分に受けることが出来れば健康であるとされてゐる。更に男子は天の表象、女子は地の表象、とされてゐる。故に、一家に於て、男子は天のつとめをなさねばならない。天のつとめとは、地に雨降らし、光りを地上に送ることがこれである。

これを具象的に言へば、男性は日々に勞力を盡して、その所得を一家に恵み、一家の保ちとしなければならぬ。かくてこそ一家は成立してゐる。

然るに男性が、得たる所得を一家の保持に宛てず、自己の欲望の赴くがまゝに、或は飲酒に、或は女性に、個人的快樂を貪るためにのみ浪費する時は、一家は生活上に支障を來し、必然的にその日その日に不足を重ねる。不足の理がつもる。

一方女性は地のつとめをする。即ち天の與ふるものを享けて、そこに種を殖す。地にあるものを抱擁し愛撫することがそれである。

然るに女性にして女性のつとめを嫌忌し、子の撫育には心を勞せずして日に美衣と美食と虚榮と虚飾とに日も足らず、かくして夫たる男性の心を痛め惱める。

男性は男性としてのつとめを、女性は女性としてのつとめを、完全に果してゐる時には中風症は起らない。

(2) 欲——この欲は、貪慾である。満腹の上にもなほ喰はんとする欲である。所謂たまるほどきたない欲である。

(3) 高慢——片意地の強いこと。自分が一旦主張した以上、その非なるを悟つても、なほ我意を通さうとする。人を人と思はず、上を上と思はず、非を非と思はず、自らの辯舌の巧みなるに仕せて他人の物をも我が物とし、他人の者をも我が者とし、然も對者との關係を、繼いで切り、切つては繼ぎ、

かくて天の理を蹂躪して顧みない。かく誤つた道を歩みつゝも猶、家族、知己、長上の言をきかず、自己を立てんとする。

以上の如き埃が中風症となつて現れる。醫學によれば、中風症は女性なれば左半身不隨、男性なれば右半身不隨は重症とされてゐると云ふ。これは、斯教にあつて、女性は右、男性は左を表象する。これに反するが故に重症である。同く中風症にしても、女性が右半身、男性が左半身は妥當であつて、輕症である。

全身半身の起たぬのは周圍の人々を倒した理のあらはれ、言語不明となるは他人を辯舌によつて巧みに欺いた理、その根本の血管の破裂はきる理（切る理——他人との種々なる關係、精神的關係をも併せて斷ちし理）のあらはれである。

この疾病は色情が大部分を占めてゐると思はれる。

齒の疫病

齒は口腔内の上下に並列し、消化器の第一の物である。これによつて食物が噛み砕かれ、同時に唾

液と混じて食道を通過して胃に到り、肝臟、脾臟等の援助を受けてこれを消化し、更に餘れるものを腸へ送ることになる。

この齒の疫患は何故なる理によつて生づるか。齒の疫病と云つても種々ある。即ち齒臭、齒ざしり、浮き齒、齒痛等その他にもあるであらうが、而して又單に齒痛の中にも上列の齒の痛みと下列齒の痛み、奥齒の疼きと前齒の疼きによつて、夫々に理を持つてゐるのであるが、先づこれを一般的に云へば、

- (1) 凡ての事理の噛みわけ、理解が出来ないこと。
- (2) 牙齒にかけて噛みつぶすやうな壓倒的な心づかひをする。
- (3) 物を噛みしめるやうな寛大さがないこと。
- (4) 夫妻、親子、兄弟、朋友のつながりの缺陷。
- (5) 不満を感じ易くして、人にふくれ顔、不平面を示す。

以上の如き埃が齒の疼きなやみとなつて現れるのである。これを詳述するに、

(1) 齒の疾病を持つ人には、寛仁大度、人を容れることに乏しい人が多い。清濁併せ呑む底の人にはこの病は殆どないと云つても誤りではないやうに思はれる。一言にして云へば偏狭にして他を責め易

い人にこの病は多いのである。

偏狭にして然も正義人を以て自誇する如き人物は、自らの心を悩まし、あらゆる事物を己れのまゝになさんとするのであるが、その凡てが自己の意志に反する結果に陥り易い。故に彼は常に心に不足を抱く。従つて互の心がすれ合ひ、そこに熱を生ずる。口熱と稱するものは、この心のすれ合ひ及び些末なる事を以て人の心を痛ましめた因によつて起るのである。

かゝる人は凡ての事理を理解することが出来ない。凡てを自己——小我と小我的見解を尺度とするからである。不平顔を人に示し、所謂「ふくれづら」を示すことが多いので、口熱と共に頬のふくれが起る。

齒は元來石灰質で、骨格と同一質のものであるから、天の理、大我を守つて小我を去らねばその痛みは去らぬと云つてもいい。

(2) 小我に偏してゐるが故に感情によつて動く結果になる。而して、對者が自説に屈伏せねば、これを齒牙にかけて噛みくだくが如き昂奮した心づかひをする。故に噛みくだく事に不足を來すやうになるのである。

(3) 物の味はよく噛みしめねば判らない。如何なるものでも丸呑みにして終つたのでは、その物の含

む最も本質的な味を知る事は出来ないのが通則である。丸呑みにして然も味を知ることの出来るのは、その物の味の大體のみであつて、最も微妙な、而して最も獨自な味は味はひ得ないのである。淡々たる水でさへ、よくよく味はへば無上の甘味を含んでゐるではないか。丸呑みにする性急人には、水の眞の味の判る筈はない。

同様に、眞に理解しやうと努めない人、小我を去つて虚心袒懐、事理の懐に入ることをなさぬ人、思索的焦慮性の人には、事物の理の本質、その微妙さ、その陰影等までも捕捉する事は出来ない。單にその概念を捉へるにすぎない。

然も、かうした人に限つて、極めて優柔不斷で、斷乎として敢行する勇氣に乏しい。故に自らの非を知つてもこれを改めるに吝かにして、何等かの遁辭を見出して自己瞞着を試みる。而して却つて反動的に他に對して苛辛な態度をとる。他人と協力して事をなす事が出来ない。他人をのみ恨む。心をくさらす。故に齒莖に膿汁がたまるのである。

(4) 齒を辭典によつて檢索するに、これをツラナルと訓み、フレルと讀み、アタルと訓してある。これに依つて見るも、齒はつながりである。つながりである。君臣、親子、兄弟、知己朋友の連結の理が含まれてゐる上に、上列下列は天と地とを表象し、従つて夫婦をシンボライズしてゐる。故に、これ

が凡て一致してその働きをなせば物の眞の味に味到することが出来るが、その度を超せば、却つて悪い結果を招來するに到る。

なほ、これを齒列の上より見るに、

- (1) 上齒ならば自分以下の者、即ち妻子、弟妹、召使。
- (2) 下齒ならば自分以上の者、即ち親、夫、兄姉、主人。
- (3) 左側は男性。
- (4) 右側の方は女性。

に對する上掲の心づかひ——埃によるものであると見る可きである。即ち、上列の左側の齒に故障の生じたのは、妻子弟妹召使等の中特に男の子、又は弟、下男番頭小僧下役等に對する誤つた心づかひが因をなしてゐる事を示してゐるわけであり、又下列の右側に痛みのある時は、祖母、母、姉、兄、嫁、主人等の心を傷付けてゐるか不平を抱いてゐるかに因するものと見てよい。

これをその症状より云ふならば、

(1) 齒の抜跡の痛むのは、自分の力の不足、徳の不足には少しも氣付かずして、他人の力や徳の不足を責める心、又、何事も自らの心のまゝにしたいと思ふ心に因る。

(2) 齒ぎしりは、常に強い心をつかつて、負けまい、勝たうとする壓倒的な心づかひをつゞけてゐることが因をなしてゐる。

(3) 齒の浮くのは、心のさだまらぬ事の御指示である。心が浮いてゐるから齒もうくのである。

(4) 齒莖に膿を財へるのは、人を怨み氣をくさらし續けてゐることに因してゐる。その場所によつて何人に對しての感情が埃となつてゐるかは推し得られる筈である。

鼻の疫病

鼻の疫病と一口に云つても、これには種々ある。即ち鼻茸とか、鼻加答兒とか、蓄膿症とか、名稱はいろ／＼であり、症状も夫々異つてゐるが、鼻を病む理には一貫した何かがあるに相違ない。

惟ふに、鼻は人間面部の中央に位して居て、腦髓とは直接の關係を持ち、物の臭氣をかきわけける性を有つてゐる。而して、俗に高慢の鼻高々とか、天狗になつてゐるとか、高慢の鼻がつぶれたとか云はれて、いづれも、心の剛頑さと誇持とに關係してゐることは注意すべきことである。茲では鼻は明らかに我慢と高慢とを表象する。

次に人の鼻毛を讀むとか、鼻毛を抜くとか云ふ俗言があるが、これは、探偵を犬と云つてゐる等から見て、鼻はある場合、疑ひの心を表象してゐる。

右の俗言はよく鼻の疾病の因を暗示してゐる。即ち、我慢、高慢、疑心等が、鼻の疾病をかもし出すのである。

更に、鼻は顔の中心にある。而して、心は親であり、目上である。この病のものは、目下に對して抱く高慢、疑心よりは、寧ろ目上に對する感情により多く因してゐるかに考へられる。

自ら省よ、鼻疾に惱む人よ。御身たちは自分の行爲に、胸中に、さうした事を抱きかくしては居ないか。又不倫の道を進つたことはないか。親を親として尊敬せずしてその缺點を洗ひ立て、他人の美しい心の香を嗅がうとせず、常に對者に疑念を抱いて、その言行を捜るやうな事をしたことはないか。現在してはゐないか。

これを一々に就て説くならば、

(1) 物事の臭ひをかぎわけける事の不可能なのは、如何なる事と雖も、自分以外の人の意見々解はこれを受納れず、又如何に熱心に、眞心を以てよき事の爲に忠告し注意してくれても、その誠の心の香をかぎわけやうとせず、單に自己の見解と一致せぬとの理由の下に徒に反對し輕侮する。かうした心づ

かひが重つて因となつてゐるのである。

(2) 鼻だけは、あらゆる物を自分の許に集めんとする心。單にそれは物質のみではなく、例へば友人知己の如きも、他と交ることを快しとせず、自分だけに引付けて置くことを希ふが如き、同様である。

又、自己の自由の爲には、親子兄弟と雖も、互に助合ふ心が少く、汚れた心づかひを積んだ理のあらはれである。

葦は元來、木の葉の朽葉など、又は他の汚物の蓄積裡に生ずるものであるが、鼻たけと雖も同じ理のもとに生ずるのである。

(3) 鼻の出血は、我慢の念つよく、心荒々しくして長上者に對して常に不足を感じ、凡てのものごとを案じ過す。而して、血はこれまことであるから、誠の出るのは萬事につけて誠意なく、心の浮動して定まらぬが故である。

(4) 梅毒性の病疾に於て、鼻の墮つる者がある。

これは明かに色情的の心づかひに誤りがあつた者である。即ち、次第に窮すれば、不知不識他を怨み、反動的に不義不倫に陥り、大道——天の理に適合せる道をくづして生きて來た因によつて、顔の——大道具が崩れ、常に人にかくれて事をなして來た因によつて、鼻の障子が落つるのである。

(5)鼻聲と云つて、言葉が凡て鼻にかゝる人は多い。これは自我心強く、他人の言に耳かたむけることをなさず、フンフンと、輕しめつけて來た理のあらはれである。これが寒國人に多いのは、寒國人は南國人に比して遙かに自我の念つよきによるのである。

(6)鼻かぜ——自分のなした事、なす事は凡てよく、假令他人から忠言を與へられても改めず、他人を怒らせたる理。その時に水くさい心づかひをなす故に、心にすぎが出來、心に隙の生じた故、そこから風邪を引込むのである。

おこり

おこりとは如何なる症狀を呈するかと云ふに發熱と退勢とが激しく行はれ、その間に於て病者は憫むのである。あつくなると、嚴冬中と雖も、裸體で氷の中をころげ歩きたくなる程あつくなる。かと思ふと急に寒くなつて、嚴暑の候と雖もなほ夜着を重ねても、なほ總身のふるひが止まらない。大の男が四五人かかつて押へ付けてもなほ慄ひがとまらない。而して寒さが退潮のやうに退いたかと思ふと、次には直ぐ熱さが交替して現れる。これも、激くなければその交替も一日おき二日おき或は三日

おき位で、決して堪えられない程苦しい病ではないが、珍らしい病氣である。

この病は如何にして生じたか。如何なる心づかひが因となつてゐるか云ふに、この病狀は平衡が全く失はれてゐる。増減が激しい。極端から極端に移動する。即ち心づかひの不平均、愛憎の念の激しくむら氣なこと。海のやうにたひらな心づかひの出來ないことが因をなしてゐると思ふ。

主我的傾向が強く、心がけあしく感情の角度が鋭くして、對者の身の毛のよだつ如き心づかひをして來た。

可愛いと思へば溺愛するが、一旦憎み出したとなれば、掌を返すやうに冷酷な憎惡を露骨に現す。所謂可愛さ餘つて憎さが百倍式の感情家であり、憎いとなれば相手の坊主のみならず袈袋まで憎いとなる。

然るに教祖は

せかいぢう神のためにはみなわが子一列はみな親とおもへよ

どれ一人として神にとつては子ならぬはない。世界一列皆すべて子である。たとへ人間だからと云つて、出来るだけは平らかな、わけへだてのない心で生きねばならない。順を追はねばならない。親子夫婦兄弟主従、その順によつて長上を立て目下を愛さねばならない。然るにこの病者にはこれが出